

2020年～2023年 コロナ禍で学生はメディアとどう付き合ったか

鈴木 裕美子^a

^a 湘北短期大学非常勤講師

【抄録】

2020年の新型コロナウイルスによるパンデミックは、世界も日本も変えてしまいました。人と人が対面で自由に接触できなかった間、メディアへの接し方も激変し、テクノロジーも目覚ましく進化しました。コロナ禍で学生は、新聞やテレビなどのオールド・メディアの報道機関の役割を再認識しました。ネット・メディアに対しては、娯楽やSNS上での交流を通じて親近感を持つと同時に「ネットいじめ」や「フェイク・ニュース」に恐怖を感じていました。コロナ禍で、Z世代の学生はどのようにメディアに接し、何を学んだのでしょうか。新しい時代の、人とメディアの関係を考える材料とするために、このコロナ禍を記録します。

【キーワード】

コロナ、メディア、メディアリテラシー、AI、フェイク・ニュース、ネットいじめ
ジャニーズ問題、ウクライナ戦争、安倍晋三元首相銃撃事件、SDGs、Z世代

はじめに

2020年、新型コロナウイルス（Covit-19）感染症は世界中で猛威を振るい、人々は未知のウイルスに翻弄され息を潜め状況を見守りました。多くの人と同様に私も、一体何が起きているのか、パンデミックとは何か知りたくて「感染症とは何か」「スペイン風邪の当時の人々の動き」など、情報を求め、様々な本や記事を読みました。

医学的なことは分からなかったものの、仮に早々にワクチン接種ができたとしても世界中が移動する時代になっていることもあり、感染の拡大から収束、コロナの影響で混乱した社会が落ち着くまでには、3年から、ひょっとしたら4年かかるのではないかと、私は考えました。

「混乱が落ち着いた後にはまた元の社会が戻ってくるのだろう」と気楽に構え「この時期をうまく乗り切ろう」と考えたものです。

2020年から2022年の春頃まで、社会はコロナ一

色となりました。私の本務は月一回最終金曜日の深夜に放送される討論番組『朝まで生テレビ！ⁱ』のプロデューサーです。2020年3月から、2022年ロシアによるウクライナ侵攻（2022年2月24日～）が起きるまでの2年間、24回放送中実に19回「激論！新型コロナ」をテーマに、コロナと社会の関係を様々な角度から取り上げました。ウクライナ戦争が始まるまでは、世界でも日本でも人々の関心の第一がコロナとなっていたのです。

2023年の終わりになって、良くも悪くもこの3年間でコロナが社会を変えてしまったことを実感するようになりました。特に、成長期がコロナ禍と重なった若者に、心理的肉体的に大きな影響を与えたことを感じています。

最も大きな変化は、社会全体でのネット・メディアの利用拡大でした。この3年間で、若者の社会やメディアの捉え方も変化していきました。

この稿を書いている2024年1月には「元の社会」は戻ってきておらず、むしろ「新しい社会」が到

来したことを実感しています。「上手く乗り切らなくてはいけない」のは、むしろこれからです。

そこで、今後の社会を考えるための材料として、この稿では、以下の順で「コロナ禍で学生はメディアとどう付き合ったのか」記録します。

1. 最新の2023年の授業について
2. コロナ以前2019年はどうだったか
3. 2020年～2022年コロナ禍の学生たち
4. 2023年に「コロナ禍を振り返る」

2019年から2023年の学生は2000年代生まれ。世間ではZ世代と呼ばれる世代です。この稿で、紹介する学生の言葉や文章については、彼らの表現を尊重し、出来る限り原文のまま載せています。

授業終了後、学生から提出されたリアクション・ペーパーも紹介していますが、これは「授業を深めるため、使用します。プライバシーに配慮します。人に知られたくないことについては書かないでください」と事前に学生に説明しているものです。本稿では一部抜粋、要約していますが、Z世代の生の声を記録するよう努めています。

なお 3. については、詳細版が湘北短大の各年度の紀要に掲載されていますので、興味のある方はそちらをご参照ください。

1. 最新の2023年の授業について

世界的なコロナの収束を受け、日本でもコロナ患者が減少、5月、厚生労働省はコロナを感染症の2類から5類に引き下げましたⁱⁱ。普通のインフルエンザと同等の扱いとなったのです。

5月19日～21日には日本はG7の議長国として広島でサミットを開催します。サミットでは初めて、G7のトップたちが揃って原爆資料館を訪れました。唯一の戦争被爆国である日本、岸田文雄首相の地元で行うサミットならではの行事でした。原爆被災者たちからは「核なき世界」を実現するため「核廃絶」の声明が出されることを期待する声がありましたが、むしろ「核抑止」に重きを置く

声明が出たことに失望の声があがりました。

ウクライナのゼレンスキー大統領も参加したこのG7に世界の注目が集まりました。2023年の前半、コロナは世界的に収束しつつあったものの、ウクライナ戦争の出口は見えていない状況でした。

そんな中、今期の大きなトピックは、世界的なChatGPTの席卷でした。

日本のエンタメ業界では、“ジャニーズ問題”の告発があり、大きな注目を集めていましたが、8月になるまで、当のジャニーズ事務所（旧）は何も語っていませんでした。

また、湘北短大ではSDGs活動の取り組みに熱心で、学生は「持続可能な発展」や「多様性」などの言葉を、ごく身近に捉えていました。

前期の授業の間には、まだ、イスラエルとハマスの対立によるガザ侵攻も、自民党の政治資金パーティをめぐる政治とカネの問題も発覚していませんでした。

1. ー(1) 2023年の学生

～コロナ明けを楽しむ者、苦しむ者～

2023年度の最初の授業は、28人が参加。その中には、前年、その前の年から降りてきた学生（留年組?）が4人。そのうちの二人は以前も受講した学生でした。私としては再会を喜ぶ気持ちと、何とか今期こそ無事単位を取らせたいという気持ちが半ばしました。

この他にも、最初の授業で「朝、起きられない」と相談に来た学生もいました。明らかに、コロナ禍から普通の生活に戻る過程でつまづいた様子です。4回目の授業では「色々悩んで眠れなくなり、起きられなくなってしまった。このままだと単位が取れないかもしれない」という学生が相談にきました。学期中にコロナに罹患した学生も複数いて、クラスの約3分の一以上が心理的にも肉体的にもコロナの影響を受けていました。就職活動が迫っていることも彼らのストレスです。世の中が「コロナ明け」へと向かう中で、ぬかるみにはまって足が動かせなくなった、という状態でしょうか。

一方で、失われてしまった時間を取り戻そうと

授業の間にも新しい友人を作ろうとして、共通の話題、部活が一緒とか、アルバイトで一緒だったとか、で、はしゃぐグループもいれば、恋の花も咲き、「授業に参加できた」学生たちは楽しいムードに包まれていました。

ファッションも気楽に自由になりました。本学はファッションに関するコースもあるのでそれぞれの個性を生かしているのが良いと思い、就職活動では黒いスーツに白いシャツ姿となる彼らが、束の間、お洒落を楽しむ様子を私も楽しみました。コロナ禍で在宅勤務が増えたこともあり、社会全体が次第にカジュアルなスタイルに変化したこともあり、また、酷暑が続いたこともありました。実際問題、コロナ禍の夏は暑さ対策も大切だったのです。

2023年の夏、関東では35度を超える酷暑日が続きました。「地球が沸騰している」という声もあり、地球温暖化を危惧する声があがり、学生がSDGsを気にするのが良くわかる夏が続いていました。

世の中では次第にマスクを外す人の方が多くなっていましたが、クラスの中でマスクを外すものはごく少数で、学生は来るべき就職活動のため、まだまだ感染対策を続けなくてはならなかったのです。

2023年度の学生の全体の印象としては、まずは「普通の生活」に戻るのが精いっぱい、という感じでした。

1. ー(2)2023年の学生の関心

その① ～AIと向き合う(i)～ 学生の視点

2022年11月。アメリカのオープンAIがテキスト化に優れた対話型AI（人工知能）ChatGPTを発表。瞬く間に世界中を席捲しました。2023年の大きなトピックになることは誰の目にも明らかでした。ニュースや情報番組でも解説があり、会社でも巷でも、ChatGPTとは何ぞや、と、シンポジウムなどが競って開かれました。「大規模言語モデルが進化し、これまでのAIよりテキスト化が滑らかだ」というのが大方の説明でした。AIについて報じるニュース、シンポジウムや勉強

会では、必ず使用上の注意が付け加えられました。

- ①情報漏洩リスクに注意！：ユーザーが質問した内容は、AIエンジンの学習やサービスの向上に利用されています。質問文として入力する内容は、機密情報や個人情報を含まず、公開されても問題のないもののみ、注意してください。
- ②回答が正確とは限らない！：AIはユーザーが入力した内容を学習します。間違った情報、偏った意見などを学習してしまう可能性もあります。回答した内容が正確とは限りません。利用者自身が慎重に見極める必要があります。
- ③著作権の侵害に注意！：AIが回答した内容の中に他人の著作物が含まれる可能性があります。AIの回答を利用する場合は著作権侵害とならないように注意して下さい。

4月、オープンAIのサム・アルトマン経営責任者（CEO）は世界ツアーに先駆けてChatGPT公開後初の外国訪問先に日本を選びました。

岸田首相に面会した映像もニュースで多く流れて、6月の日本訪問では慶応大学の学生と対話を行っています。（2023年6月13日 朝日新聞1面と14面）。

6月20日の授業で、私はこの記事を学生と共に読みました。以下、記事の要約。

…アルトマン氏は最新のAI技術は「世界にとって恩恵の方が（リスクより）はるかに大きい」と強調したが、同時に「恩恵も多くなるにつれ、リスクも同様に大きくなる」とし、バイオテロのリスクを懸念、長期的なリスクとして権威主義国家などによる悪用に言及した。各国のリーダーたちがメリットを損なわない形で、グローバルな規制を導入することに足並みをそろえたことが印象的だったとも語っている。…

「同年代の学生たちがAI企業のトップとやり取りした」という記事は学生の興味を引きました。記事のこの部分が気になったという学生もいました。

…「質問に立った一人目の学生は、アップルの創業者スティーブ・ジョブズが、自らの子供にiPhoneを使わせなかったという話を引き合いに、自らが開発し

たサービスを家族に薦めるか、尋ねた。アルトマン氏は「自分がいいと思える製品を作ることに専念したい」と述べるにとどめた。…

記事を読み終えて、「ちなみに、Chat G P Tを使ったことがある人は？」と尋ねると、数人が手を挙げました。その中の一人が「(使い勝手は)、まだまだ、です。だって、僕の質問に、上から目線の変な文章で答えてましたよ」と笑っていました。「ちょっと、便利かな、と思いました」という学生も。

手を挙げて率先して答えた学生は「自分は、ちょっと進んでるのかな、ちょっとカッコイイ感じかな」といった雰囲気でした。

「“A I が馴染みになった元年”のコメント」を、この日の授業のリアクション・ペーパーから紹介します。

まず、「A I に関しては、開発者だけでなく、使うがわも気をつけなくてはならないことがたくさんある」という指摘がありました。

対話型で質問に答えるChat G P Tを試した学生のコメントです。

「まるで人間みたいに思えてくるけど情報の価値や信用が下がってしまうような感じがする。」

「試しにアニメ作品などChat G P Tに聞いたことがあったが、マイナーな作品だったせいか、主人公の名前や内容が違って面白かった。」

一方で、就職活動のために使用したのでしょう。「『〇〇会社はどういう会社』と調べた際に細かく、そして瞬時に回答していて改めて技術の進歩ってすごいなと思った。」

絵を描いているという学生は、きれいな絵を見て驚き、著作権の問題についても考えました。

「(その絵は)、実はA I で生成したものだを知って驚きました。しかし、人のイラストを勝手にA I の学習に使用され、困っている絵描きをSNSで見かけたこともあり、とても複雑な気持ちになりました。」

そして、「自分が時間をかけたイラストをA I に学習させ生成したイラストを我が物顔で、SNSで発信していると思うと、努力を踏みにじられた

ような気がしてあまりいい気はしないなと思いました。」

別の学生はこうまとめています。

「Chat G P Tは素晴らしいものであると思う。調べ物やアイデア出しの手順を簡略化でき、まとめられた文章で答えを見ることができる。それらの精度も高く、言語数も多いのがミソである。ただ、私はChat G P Tの乱用には反対する。便利になればなるほど。人とは考えるのをやめる。考えなくなると頭脳の衰退は表れやすくなり老化の促進につながっていくだろう。」

「人は考えることが大切だ」ということです。

また、「人は、人とのつながりが大切だ」と思う反面、労働力としての利用価値はありそうだな、と思っているようです。

「Chat G P Tとして、LINEで人工知能と会話できるアカウントがあるけど、会話することはできるけど、A I と話すよりも人間と話した方が楽しいな、と思いました。でもホテルのフロントや飲食店などではとても便利だなと思いました。」

何にせよ、学生はほぼ全員が「A I も使い方次第」と割り切っています。

「A I の使い方を間違えると犯罪に使われたり、戦争が起きたりと怖いことも多く便利な存在だけど一歩間違えたら大変なことになるんだと思いました。」

「A I はすごいけど絵とかはやっぱ人間が心を込めて作ったものの方が感動的なものになると思うし、より良いなと思った。自動運転は便利だからよいと思う。でもたまに誤作動とかおこすからそれが怖い所だなとあらためて思った。」

私も試みにChat G P Tにこんな質問をしてみました。

「コロナ禍の学生の生活はどう変わったでしょうか。」

答えは以下の通り・・・・・・・・・・・・・・・・

「コロナ禍の学生の生活は大きく変わりました。以下にいくつかの変化を挙げます。

1. オンライン授業：多くの学校や大学が対面授業からオンライン授業に切り替えました。学生は自宅から授業を受けるため、通学時間や移動時間が省けますが、対面授業と比べて対話やディスカッションの機会が減る場合もあります。
2. 社会的な活動の制限：コロナ禍では、学生の社会的な活動が制限されました。大学のイベントやクラブ活動、スポーツ活動などが中止またはオンライン形式に変更され、学生同士の交流が制約されたことがあります。
3. 学習環境の変化：自宅での学習が増えたため、学生は自己管理や自己学習能力をより重要視するようになりました。また、オンライン授業による技術的な問題や環境の変化に適応する必要がありました。
4. 心理的な影響：コロナ禍は学生の心理的な健康にも影響を与えました。オンライン授業や社会的な制約により、寂しさや不安感、ストレスが増加することもありました。学生は自己ケアやメンタルヘルスの重要性についても意識するようになりました。

これらの変化は個人によって異なりますが、コロナ禍は学生の生活に大きな影響を与えたことは間違いありません。」……………

正答です。

①～④の項目建てもしっかりとしています。私がまとめるよりも上手に要約されているようです。これは、ネット上に多くの人たちがあげた経験など諸々をA Iが学習して、日本語の文法に従ってテキストとしてまとめたものなのです。社会の知見をうまく蓄積しています。

ただ、Chat G P Tを使用した学生が感じたように、表現としてはもう少し滑らかな表現があっても良いかもしれません。A Iが学ぶ言語テキストデータの量として、日本語は圧倒的に少ないことが指摘されている通りのようです。

付記：A Iは日進月歩以上の進化を遂げています。人手不足解消のため、会社や自治体でもA Iを導入する例が増えています。

メディア界ⁱⁱⁱでは、NHKはすでにA Iアナウン

サーを活用。2023年の年末の話題は、A Iを使ったザ・ビートルズの最後の楽曲『ナウ・アンド・ゼム』の発表があったことと、漫画家の故手塚治虫さんの『ブラック・ジャック』の新作がA Iと共に製作されたことでした。

1. ー(2)2023年の学生の関心

その① ～A Iと向き合う(ii)～

技術が、政治を超える時代

テクノロジーは政治や国際関係と切り離せない程、強力な存在になってしまいました。

A Iは、元々は通信技術とコンピュータを土台とした技術、テクノロジーです。現在では、GAAFAと言われる巨大IT企業、あるいは、突出した企業家個人の行動が、A Iの未来を左右すると言っても過言ではない時代になっています。

オープンA IのアルトマンCEOをめぐっては2023年末解任劇と復活劇が繰り返され、2024年にはグーグルがオープンA Iとの連携を模索している、というニュースも伝えられています。

世界のトップ企業と企業家個人が、A Iの未来ひいては、社会の未来を握っているかのようです。

2023年9月14日、NHKで「IT大手トップとA I規制の法整備を初協議」というニュースが流れました。民主党上院トップのチャック・シューマー院内総務が「イノベーションと安全性の両立を図る」ための会議をし、その中で「イーロン・マスク氏が『A Iが間違った方向に行った場合の影響は甚大だ、事後に規制するのではなく先手を打たなければならない』と発言した」と報じられました。このニュースはアメリカのものでしたが、A I規制の法整備については一国だけではなく世界的な法規制の必要性が叫ばれています。上記したように、オープンA Iのアルトマン氏も「世界的に利用方法を考えなくてはいけない」と述べています。

さて、技術が（あるいは技術を持つものが）、国家を超えて、世界の状況を変えてしまう例として、イーロン・マスク氏を挙げた学生がいました。

アメリカの実業家マスク氏は電気自動車メー

カーの特斯拉や宇宙開発事業のスペースX、衛星通信事業スターリンクの創業者で、彼の行動は常に世間の耳目を集めています。

マスク氏は2022年ロシアがウクライナに侵攻した際に、ウクライナにスターリンクを無償提供したことで知られています。これにより、ウクライナ軍はロシアの侵攻に対抗することができ、ウクライナの人々は自国の被害状況を世界に訴えることも可能になりました。この時、多くの人はマスク氏を“ウクライナ側の正義の味方”と考えました。

2022年の授業で、ある学生は「イーロン・マスクはまるで国王のようです。しかし、一人の人間に、戦争の行方を左右されているのでしょうか」とリアクション・ペーパーに感想を寄せました。

翌年、一部メディアが「ウクライナ軍がクリミア半島のセバストポリに駐留するロシア軍を奇襲しようとしたとき、マスク氏が、スターリンクへの接続の遮断を技術者に命じた」と報じました。

はたして、マスク氏は、“ウクライナ側”なのか、“ロシア側”なのか。彼の行動にはどのような意図があったのでしょうか…。

2023年9月9日フォーブス誌のオンライン記事によれば、マスク氏は「ウクライナ側から、セバストポリまでスターリンクの通信を有効化するように要請されたが、拒否した。もし要請に応じていれば、重大な戦争行為と紛争の拡大に加担することになっただろう」と述べたそうです。

「通信の遮断」か、「通信の有効化」か。いずれにせよ、実態としては、「自分は核戦争に加担したくない」という事です。

ウクライナ戦争の初期でも、セバストポリの奇襲攻撃の件でも、まさにテクノロジーが戦況、政治、国際関係を左右した例です。

9月19日のテレビ朝日『報道ステーション』では、イーロン・マスク氏の伝記を書いたウォルター・アイザックソン氏はこの経緯について、大越健介キャスターの問いに答えました。

「スターリンクは戦争用じゃありません。みんながNetflixを見てくつろいだり学校の課題をオンラインでこなしたり平和な良い事を何かするためのもので、無人機で攻撃するためのモノじゃないんです」というマスク氏の言葉を紹介、マスク氏

のイメージするスターリンク、通信衛星サービスの在り方が伝えられました。

それにしても、あの学生の指摘通り、戦況や国家の命運を一人の企業家にゆだねてしまって良いものでしょうか。

マスク氏は投稿サイト米Twitter社を買収。2023年7月には世界中の人々の生活に浸透していたTwitterの青い小鳥がさえずっているロゴマークを廃止し、X（エックス）を新しいマークとしました。マスク氏は7月23日「私たちはTwitterブランドと青い鳥マークに分かれを告げる」と投稿。たった一人の企業家の行動で戦争の行方が変わり、社会や世界の様相が変化していきます。

…青い鳥がXに変わった時に、歌人の俵万智さんはこんな歌を詠んで話題となりました。

「言の葉を ついと啜（くわ）えて 飛んでゆく
小さき青き鳥を忘れず」

「このままで いいのに異論は 届かない マスクの下に唇をかむ」

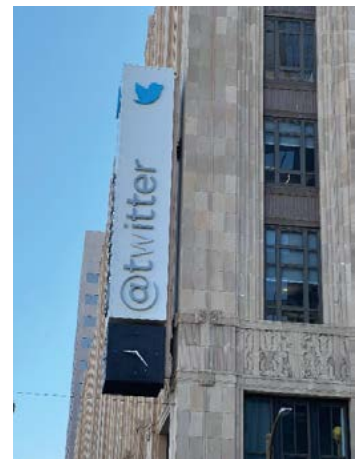
私たちは良かれ悪しかれ、テクノロジーをもつ者・企業が国家を超えていく時代に生きています。

今、AIの技術をめぐるのは連日ニュースが流れています。しのぎをけずる開発競争の最中、私たちに今できることは何でしょうか。

私が学生に伝えられるのは、「どんなメディアがどんな風に成り立ち、どんな風に発達し、どんな特性があるのかを知り、どんな

役割を果たし、技術的・倫理的に社会にどう受け入れられていくか、注視すること」だと考えます。

そして、利用者として疑問を持ち、時には、声をあげることも必要ではないでしょうか。



「青い小鳥」のロゴマークがあった当時のTwitter本社：
サンフランシスコ 2023年7月18日

1. —(2)2023年の学生の関心

その②～『メディア・パズル』から見えた 「広告」と「取材者」～

毎年私の講座では、メディアの成り立ちなどを一通り学習した学期の後半に『メディア・パズル』と称して「自分と7つのメディアの関係を図に表す」という数人ずつのグループワークを行っています。

これは、テレビ朝日と東京大学の3年間にわたるメディアリテラシー研究『ろっぽんプロジェクト』から生み出されたワークショップです。

「本を読んだり、座って専門家の話を聞いたり難しい知識を交換するよりも、まず紙と鉛筆、体を使って、わいわい楽しみながら、色々な人と一緒にメディアについて考えてみましょうよ」というものです。

この考え方を下敷きにして、この講座では、最初に各自がメディアと考えるものを7つ（例えば、新聞、ネット、ラジオetc）を挙げてもらい、次に、自分とメディアの関係をみんなで話しながら図を完成させます。

2023年版を紹介する前に、比較として、2019年、2021年、2022年の図の代表例を挙げます。（2020年はオンライン授業の為グループワークでの作画は出来ませんでした。）

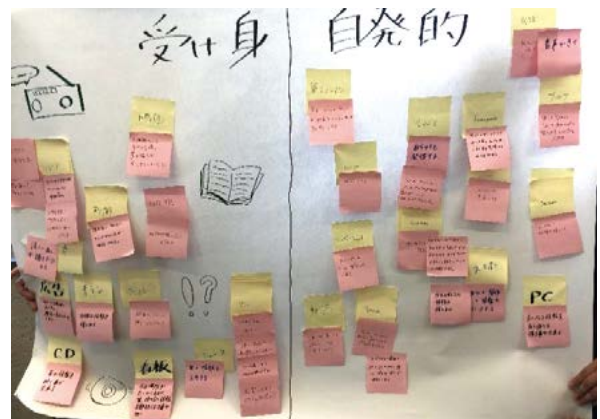
2019年：この図は、“私”を起点にしてメディアへの親近感を同心円状に描いています。『メディア・パズル』では多くの場合、このように“私”が中心に描かれます。



2021年：“私（Me）”は様々なメディアに関心を持ち、接しています。



2021年：下の図は模造紙そのものが“私”で、“私”がいかにメディアに接するか、「自発的」と「受け身」に分けて分類しています。



2022年：この図の中のどこにも“私”はいません。このグループは、なぜ、この図に“私”が存在していないのか、上手く説明できませんでした。



2022年はコロナ禍の生活もすでに3年。この間学生の生活は学業も娯楽も就職活動も、常に掌の中にあるスマホと共にありました。このグループは、特段“私”を意識することはなかったのだから“私”を描かなかったのかもしれない。

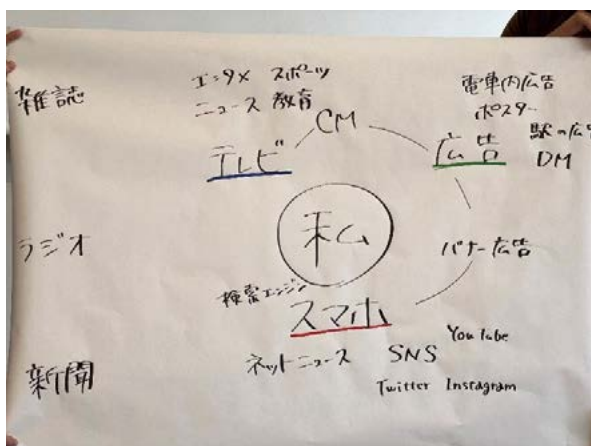
さて、今年2023年は4グループが発表しました。各班の発表は以下の通り。

- ①“私”を中心において、今、身近だと思うメディアと、将来、身近に感じるだろうメディアを分けて表示したもの
- ②“私”にとって、便利なメディアを並べたもの
- ③どんな情報にも広告がついている…広告も情報として大切、と強調したもの。
- ④記者（取材者）を中心考えたもの。「どんな情報も誰かが取材し発信している」ので、取材者が中心にくる、というもの。

上の2つは例年同様のものです。自分を中心にして自分にとって「便利な順」「身近と感じられる順」などに、メディアが配置されます。総じて今の若者らしく、「私に一番近いものはネットであり、遠いものは新聞」となっています。

さて、今年らしいな、と思って、私自身新しい発見があった③と④を紹介します。

③は、広告に焦点をあてた図です。



学生にとって最も身近なメディアは、スマホ、ネット・メディアです。たしかに、ニュースの記

事を読もうにもYouTubeで動画を見ようにも、全て広告が前面にでてきます。目的の記事に行きあたり最後まで記事を読もうとするまでに、数回広告を見ることになることがしばしばです。「広告あつての記事なのだ、動画なのだ」と思えば、なんということはないのですが、時間的には10秒もたたないうちに、数回は広告と遭遇するのです。

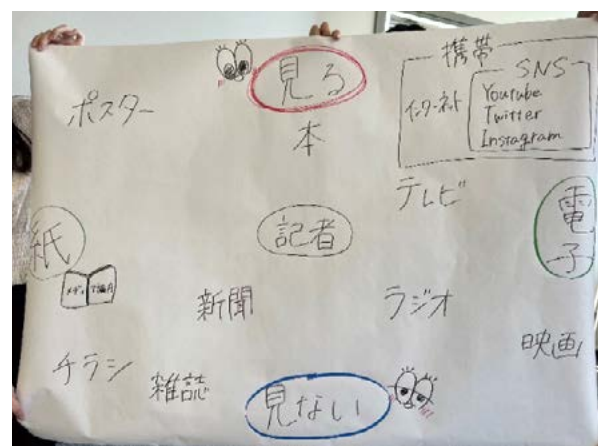
テレビ局でも民放においては広告、コマーシャルの時間はありますが、ネット・メディアと決定的に違うのは、放送基準というものがあることです。そもそも放送時間の全体量の中における番組の占める割合と広告が占める割合が定められており、それがさらに番組であるか、広告であるか、視聴者に分かり易く示すことが求められています。

広告のおかげで視聴者は民放を無料で見ることができます。民放は広告主・スポンサーに支えられて営業をしているわけですが、スポンサーと民放は、広告の時間が番組の本編を超えるような仕組みを作ることはありませんでした。

「おカネは出すが口は出さない、広告も良識の範囲で」という、ビジネスモデルです。ひと昔は「民放はコマーシャルが多すぎる」などという声がありましたが、今はあまりそういう声は聞こえません。

学生は、ネット・メディアと接している事が多いため結果的に広告に頻繁に接しています。③のグループの学生は、メディアと広告は切っても切り離せない関係である、と考えました。

④のグループは、最も今日の発想です。記者（取材し発信する人）を中心においています。



新聞もテレビも、報道機関として取材を行っています。署名記事や〇〇記者リポートなどは、ご

く一部にすぎません。ですから、誰が取材したか、ということより、朝日新聞の記事であり、テレビ朝日のニュースが「こう書いていた」「こう言っていた」という感じです。「誰かが取材し発信している」ということを強く意識した発表は、従来はあまりなかったように思います。

ところが、ネット・メディア、特にSNS上では誰が発信しているか常にわかります。世界的に匿名率が高いと言われる日本でも、発信者のハンドルネームはあります。取材者と発信者がほぼ一致しているSNS上では「○△□さんの意見」「×○▽さん発の面白映像」などが、常に流れているのです。YouTuberなどは「発信者」そのものが注目の的なのです。

物心ついた時からSNSと付き合っている学生たちが「情報とは誰かが取材し、発信するものである」というメディアリテラシーの基本に気が付いたのは当然のことだったかもしれません。

このグループは「この取材者は、僕かもしれないし、新聞記者かもしれないし、YouTuberかもしれないし、TikTokの人かもしれない。だけど、そういう取材をする人がいなければ、情報はもたらされないという事に気が付いたので、この図の中心においてみました」と説明しました。

振り返れば、2021年はワクチン・デマのネット情報に踊らされて学生たちは大混乱していました。その時、私は「それは事実か憶測か、見分けてみましょう」と学生に冷静になるよう求めました。

その2年後、2023年になると学生はネットの森に深く入り込み、そもそも、「情報というものは誰かがもたらすもの」という肌感覚を持ち、メディアリテラシー的感觉で情報に向き合うようになっていました。社会の変化を感じた一コマでした。

1. ー(2)2023年の学生の関心

その③ ～「ジャニーズ問題」を どう考えたらよいのだろうか～

2023年度の日本社会を語るうえで、避けて通れないのがジャニーズ問題です。

4月12日外国人記者クラブで元ジャニーズJrのカウアン・オカモト氏は実名顔出しで、2019年87歳

で亡くなったジャニー喜多川氏による性被害を告発しました。その後も被害者の実名告発が続きました。

ネット上では、ジャニー喜多川氏の性加害疑惑をメディアが積極的に取り上げなかったことが被害を拡大させたのではないかという、メディアの責任、特にテレビ局の責任を問う声が大きくなっていきました。2004年に裁判所が、性的虐待について週刊誌記事（週刊文春）の重要部分を事実と認定したにもかかわらず、「テレビ局は、ジャニーズ事務所に『忖度』して、問題化してこなかったのではないか」という指摘です。

同時に、ネット上では、告発した被害者たちへの非難・中傷が激しさを増していき「ジャニーズをつぶすのか」など、大混乱の様相を呈していきました。

学生の多くはジャニーズのタレントが大好きで、好きな作品についてのレポートを書かせれば、ジャニーズのタレントが出演しているドラマを挙げたものが多くいたので、これは学生の関心事であろうし、メディアの問題でもあるから授業で扱うべきテーマではないか、と私は考えました。

ただし、これは未成年者への性加害問題で、デリケートな問題です。しかも、加害者とされる人物はもうこの世にいません。前期の授業のこの頃はまだ、ジャニーズ事務所は沈黙を守ったままでしたから、被害者と加害者の言い分を並立的に説明できる、という状況ではありませんでした。

私はテレビ局に勤務してはいるものの、直接的にジャニーズ事務所と仕事をしたわけでもなく、テレビ局とジャニーズ事務所の関係について語れるような体験や知見があるわけでもない…。

ある日、学生に「ジャニーズの問題をどう思いますか、気になりますか」と尋ねました。「興味はあるがよくわからない」「意見を求められても困る」というような、一寸迷惑そうな、曖昧な回答が多かったのですが、ある男子学生は「男性が性被害にあうとは全く知らなかった」と言いました。これには、どの様にこの問題を取り上げて良いのか、私はすっかり悩んでしまいました。

5月20日朝日新聞の夕刊「藤田直哉のネット方面見聞録『性被害告発 受容へ変化したファン心

理』」を読んで、私自身、目からうろこが落ちた思いでした。

藤田氏は、ジャニーズ問題を語るうえで欠かせない、重要なピースであるファンたちを追う事で、事件の概要を明らかにし、メディアと社会の関係について考えています。

一部引用します。

「当初は、性被害を告白した者に対するジャニーズファンたちのセカンドレイプと否認の書き込みがあちこちで目立っていた。…（中略）…しかし、この論調は変化した。当初は混乱し否認していたファンたちの気持ちは、徐々に言語化され、共有されながら変異して行った。…（中略）…自分がジャニーズにお金を落としていたことが「性搾取」「性加害」に間接的に加担した罪になるのではないかという重い問題に向き合おうとする者も次々と現れた。しばらく後には、ファン自らジャニーズ事務所に調査を求める署名運動が行われるようになっていった。否認の後、事態を受容し、回復し、前向きに行動していこうというプロセスが、ネットにおいて相互扶助的な言論の中で展開していったように見える。」

そして続けて

「ここには希望があるかもしれない」と。

藤田氏はジャニーズのファンの気持ちを追いながら、「ネット・メディアの可能性」に言及していました。ネット上の言論空間の中で人間が成長する姿を見ていたのです。まさに、メディア論の核心をつく記事でした。

ファンたちはその切実な思いを交換ができる場を得て、事実を明らかにしたいと署名活動まで行うようになったのです。その思いが、後のジャニーズ事務所の会見の開催にもつながっていったことでしょう。

ネット・メディアの創成期に、草の根的な民主主義の場になるのではないかと期待した人たちがいましたが、まさにその様な一連の動きを活写した記事でした。

一緒に記事を読んだ学生の多くは「ジャニーズのファンたちの気持ちが良くわかる」と共感していました。ファンたちが、自分たちが加害者側に加担したのではないかと、自分の立位置を変えて問題に向き合う姿勢に感心する者もありました。

学生は「ネット・メディアの可能性」を認識し、同時に「人間には、思いや意見を交換する場が必要であること」を学びました。

その後、夏にはジャニーズ事務所は性加害のあった事実を認め、被害者救済を行うという会見を開きました。秋にかけ連日のように報道があり、ジャニーズ事務所は看板を下ろし、被害者救済とエンターテインメント部分は別会社になるなど、大きな変革がありました。

一方、テレビ各局は検証番組を作るなど、猛省を促されることになりました。そこに『忖度』があったのか、なかったのか…、事実関係は各局で濃淡はありましたが「倫理的に許されぬ行為には毅然とした態度で臨むことが求められている」そんな当たり前のことを再確認したことは、どの局も同じでした。

新聞でも、毎日新聞11月27日のオピニオン欄などでは、テレビ各局の検証をまとめ、併せて、新聞報道についても言及、メディアが取り組むべき課題を考えています。

なお、2023年、最初に一連のジャニーズ問題を告発したのは、イギリスのBBC放送のドキュメンタリー『J-POPの捕食者 秘められたスキャンダル』（3月18日放送）でした。

オカモト氏の会見は、外国人記者クラブで行われました。日本は「外圧に弱い」と言われますが、今回もその一例として記憶されるはずです。

1. ー(2)2023年の学生の関心

その④ ～映画を通して「SDGs」を考える～

2015年、国連総会で採択された「持続可能な開発目標」＝SDGs。「世界中にある環境問題・差別・貧困・人権問題といった課題を、世界のみ

んなで2030年までに解決していこう」という計画・目標のことです。コロナ期間中には、街中でも、持続可能な開発のための17の国際目標のポスターが目につくようになりました。

湘北短期大学ではSDGs活動に熱心に取り組んでいます。学内で、学生たちは、ごく普通に「先週はSDGs活動に参加した」と話していました。地球環境問題は将来世代の問題でもあるため、大人よりも若者の方が敏感なのかもしれないな、と、私は思いました。

私の授業では、新聞・ラジオ・テレビ、メディアの成り立ちや特性などを取り上げます。

今年度の映画についての授業では、最初に「世界で最初の実写映画」として知られる1895年に上映されたフランスのリュミエール兄弟の約50秒の映画『工場の出口』を一緒に見ました。当時の人々は、動く映像に驚きましたが、工場から労働者が出てくるというテーマも、実に当時の時代性を良く映し出したものでした。私はかつて、この映像をリヨンのリュミエール兄弟の博物館で見ましたが、今は、わざわざリヨンまで足を運ばなくてもHPからネット映像として実に「お手軽」に見ることができます。

ある学生は「世界最初の映画をこんな風に見ることができて、感動した」と言いました。「誰かが作品を作り、残してくれたから100年以上前の様子が分かるんですね」と。

授業では、次に、映画の持つ普遍性、作家性、記録性などについて、作品を見て感じてもらいたいと、『アフガンに命の水を～ペシャワール会26年の戦い』（制作：日本電波ニュース社）の56分の作品を上映しました。

アフガニスタンの人々の生活向上のため、医療、そして、水を供給するための水路の建設などに尽力した中村哲医師の生存中に記録された作品です。DVDの帯書きには「2003年3月から、6年の歳月をかけ全長24キロの用水路を拓いた一人の日本人医師と数十人の日本人青年達。そして共に働いた60万人のアフガン人。戦乱と干ばつのアフガニスタンに3000haの田畑が蘇る。」とあります。

普段、学生はエンターテインメントとして映画を見る事が多いようですが、皆、このドキュメンタリー作品に引き込まれていました。

この日のリアクション・ペーパーを要約します。

「私はあまり映画を見に行かないのですが、映画は大きなスクリーンで迫力があり、テレビと比べて見入ることが多いため、映画を作った人の伝えたいことや映画に出てくる人の心情を感じ取りやすいと思った。今回の映画はドキュメンタリーに近かったけど、アフガニスタンの現状や現地にいる人々の悲しみや苦悩、中村さんの優しさがひしひしと伝わってきました。」

中村医師への尊敬の念と同時に、水の大切さに言及した感想が多くありました。

「中村さんがとてもカッコよく見えました。日本人ってやさしい。水一つでこんなに豊かになるなんて知らなかった。日本はきれいな水があるのは当たり前だから」「いつでもどこでもすぐに使う事の出来る水がある日本はとても恵まれた環境であり、住んでいる私は当たり前だと簡単に思っただけなのだと思います。」「最初は荒野だったアフガンの大地が緑豊かに変化したのを見て感動した。」「日本はじゃ口をひねればすぐにきれいな水が出てくるからアフガニスタンの人の気持ちは全然わかることができないけれど、本当に苦しいことだと思う。水がないと生きれないとあらためて実感した。日本はきれいな水がいつでもあって本当にありがたいんだなって思った。」

何ができるのか、考えた学生もいました。

「映像を見た時、水や食料など当たり前にある生活が困難な人達もいて、自分たちの生活のために命を懸けて頑張っている人たちもいるのだと思うと、自分にも何かできるんじゃないか、と考えてしまいます。」「中村さんの映像を見て、厳しい現実を知りました。私たちはどんどん便利で生きやすい世の中になっているけれど、技術や費用はもっと使うべきところに使うべきだと思いました。」



「アフガンに水を」を視聴する学生たち

中村医師は2019年現地で凶弾に倒れ、アフغانستانでも日本でも人々は大きな悲しみに包まれました。しかし、この記録作品があることで、中村医師の志と偉業、そして、人にとって大切なものは何かが伝わります。

学生がこの作品から受け取ったものはまさに、SDGs 的感觉です。紛争が普通の生活を破壊する事、水が人の命を支えている事、地球上には困難を抱えながらも協力して生活を取り戻す努力をしている人々がいることなどを知り、地球市民としてどう行動すればよいのか、考えた時間でした。

付記：なお、昨今はテレビ局も過去のドキュメンタリー作品をネット展開することが多くなり、コロナ禍ではドキュメンタリーチャンネルも人気を集めたと聞きます。2023年、私の周辺のテレビ制作者の中にはドキュメンタリー映画に挑戦した人^vもいます。時代の記録の大切さを多くの人と分かち合いたいという、これもコロナ時代の流れでしょうか。

1. — (2) 2023年の学生の関心

その⑤ ～『ラジオ体操』と「多様性」～

(i) ラジオの歴史と、番組『ラジオ体操』

2023年は関東大震災から100年の節目の年でした。ラジオの愛好家の間では、「もし、ラジオが大震災の時に日本にあって、正確な情報が流れていれば、デマや飛語流言などによる朝鮮人虐殺はなかったろう」と言われているそうです。

…授業では、大震災のデマによる事件についてごく短くしか触れることができませんでした。ただし学生に興味があれば、学期終了後であっても、9月の震災100年のニュースに耳を傾けてくれるかもしれない、と思ったものです。…

日本政府は、急ぎ1925年からラジオ放送を始め

ました。

当初、ラジオは民間事業として計画されたものの、1926年には、社団法人・日本放送協会（戦前のNHK）が誕生。1928年昭和天皇の即位の大礼の実況を契機に全国中継システムが確立。

この御大典記念事業として開始されたのが「ラジオ体操」でした。満州事変勃発の1931年には「ラジオ体操の会」が組織され全国的に急速に普及しました。「ラジオ体操」の起源は、マスメディアとしてのラジオの特性を生かした国家的な事業だったのです。

ラジオは、第2次世界大戦中は「大本営発表」の手段として、終戦時はポツダム宣言を受諾する天皇の『玉音放送』を伝えるなど、国家が一元的に情報を管理し国民に「国家の意思を知らしめる」役割を担っていた歴史があります。

そんなラジオの歴史の中に、自分たちの現在の生活につながっている「ラジオ体操」があったとは！

学生たちは、番組としての『ラジオ体操』に大いに興味を持ちました。コロナ禍にあって、人と人の距離を取った“オープンエア”の行事だから、と近所のラジオ体操に参加した、という学生もありました。小学校時代の夏休みに参加している学生も多く、そのルーツを知って喜んだ学生もいました。

ちなみに、「ラジオ体操」はアメリカの生命保険会社の広告にヒントを得たものだそうです。

実際、今の「ラジオ体操の会」の実施母体には株式会社かんぽ生命が名を連ねています。

NPO全国ラジオ体操連盟によると、「ラジオ体操はかんぽ生命の前身である逓信省簡易保険局が先駆けとなり、国民の健康保持増進のために『国民保険体操』として、普及が始まりました。1928年11月1日に東京中央局（NHK）から『ラジオ体操』の放送が初めて流された」とあります。実に95年も前にスタートした番組でした。

さて、『ラジオ体操』の流れをくむ番組『テレビ体操』（NHK・Eテレ）は、1957年10月7日にスタートしています。これも、66年の歴史がある長寿番組となります。この番組は、長い間、画面

で体操をしているアシスタントは女性だけだったと記憶しています。「体操のお姉さんたち」です。

ところが、コロナ期間中、2021年秋の改編期頃から、男性のアシスタントが加わり男女混合チームになっていました。ユニフォームも男女デザインが同じ。あえて性差を強調せず、あっさりとしたTシャツ短パン姿が基本です。「男女の役割を固定するな」という考えの表れでしょう。

放送で、暗黙裡に男女の役割を固定化させるというのは、「アンコンシャス・バイアスを掛けることにつながるのでやめましょう」という判断があったのか…。この男女混合チームは、まさに「多様性を認めている」といえることなのでしょう。視聴者からは「最初は違和感があった」などの反応もあったようですが、当たり前のこととして特段大きな話題にはなりませんでした。

1975年、食品会社の「私作る人、僕食べる人」というキャッチ・コピーのCMが、当時かなり話題になりました。

「料理をするのは女性で、それを食べるのは男性」という設定です。

これには、まず「男女の役割の固定化をしている」という批判と、次に「テレビCMとしてお茶の間に流してよいのか、テレビ局は社会への影響力を正しく理解していないのではないか」という批判がありましたが、これは主にフェミニズムの観点からの問題提起でした。

ところが今は、むしろフェミニズムを越えて、「ジェンダー平等」の観点から「男女の役割を区別しない」という流れが加速しているようです。

余談ですが、アメリカでは第一次世界大戦後、無線クラブなど草の根的ネットワークがたくさんあり、現在のラジオ局の前身のような動きが全国でありました。1920年には、ペンシルバニア州でタイムテーブルを持ったラジオ局KDKA局が放送を開始しています。

アメリカのラジオで最も長寿とされる番組は、テネシー州ナッシュビルのラジオ局WSMの『グランド・オール・オープリー (Grand Ole Opry)』です。1925年の開始で『ラジオ体操』の3年先輩

となります。観客を入れたカントリー・ミュージック・ショーの生放送で、今も全米から音楽ファンがこの番組をお目当てにやってきます。過去には、公開収録だったり一時はテレビ放送化されたり、時代時代にスタイルの変化はありましたが、観客を入れたショー形式の「みんなで歌を楽しみましょう」という番組の骨格は変わっていません。

NHKの『ラジオ体操』は、運営母体は戦前のNHKで、戦後、現在のNHKに放送は引き継がれました。時代と共に、運営母体や体操の内容や番組の演出は変化していますが、「みんなで体操をしましょう」という番組の基本的な骨格は1928年から変わっていません。

その発展形が『テレビ体操』という訳です。

学生たちが「自分が知っている番組がそんな昔から続いていたんだ」と感心したのは道理かもしれません。

そして、そんな古い番組が生き残ってきたのは、番組の骨格を残しながら、現代的な価値観「多様性」に舵を切るなど、をして、時代の変化に柔軟に対応してきたからでしょう。

(ii) 民放連放送基準の大改正

さて、人々の意識の変化は、令和の「放送基準」の大改正にもつながっています。

放送界では、2023年4月、民間放送連盟（民放連）の「放送基準」が改正されました。

“令和の大改正”と言われ、人権意識と、多様性尊重の流れを受けたものでした。全条文152条のうち、約3割の45条が改正されましたから、まさに大改正です。

放送局は、日本国憲法の精神の下、NHK・民放共に、放送法に基づいて放送しています。放送法では、国民の大切な財産である電波を利用するのだから、放送局は国民の福祉、公共の利益、民主主義の発展に資する放送をすべきと、自主自律の精神を謳っているのです。

さらに、民放の場合は、放送法を踏まえた民放連の「放送基準」というものがあり、各局は民放連の放送基準に準拠して放送しています。その大

改正を受けて「放送基準」の勉強会が、それぞれのテレビ局で開かれ、私も放送に携わる者として参加しました。

改正の一例として、第5条をみてみましょう。
「差別の禁止」をうたった基本条文の一つです。

改正前：人種・性別・職業・境遇・信条などによって取り扱いを差別しない。

改正後：人種・民族・性・職業・境遇・信条などによって、差別的な取り扱いをしない。

改正前の「性別」が、改正後は「性」の一文字になっています。これは、「性自認」「性的指向」などの性的多様性も包括できるので、「性」という表現になったというわけです。LGBTQの人たちへの理解や多様性への配慮が求められている事が分かります。

また、条文末尾は「差別的な取り扱いをしない」となりました。差別は「人権侵害」であり、それゆえ意図を持って「差別（する）したかどうか」という行為者の主観とは関係なく、「現に差別的であるかどうか」という“当事者に対する客観的事実”の問題を明確にするため、ということだそうです。

条文は、文字で見れば少し難しく感じられるのですが、放送に携わる者たちがより「人権」や「多様性」に配慮するよう促していることは確かです。

放送は、社会の動きの「合わせ鏡」です。コロナの間に、社会活動は停滞していたかのように見えたが、人々の意識は大きく変わっていたのです。

令和元年は2019年。2023年まで5年間の間の3年は完全にコロナ禍にあり、社会は停滞したかに見えましたが、「令和になってからすでに5年も経つのだ」という目で見ると、社会は確実に変化していたのです。

2. コロナ直前の2019年はどうだったか

私が湘北短期大学で初めて『メディア論』を担当したのは、コロナの気配もなかった2019年度の前期です。

2019年5月1日。元号は平成から令和と変わりました。この年の授業は「平成で始まり、令和で終わった」ことになります。

今振り返れば、コロナ禍で社会が停滞し閉じられた時間になる直前の2019年度には、今につながる様々な種がまかれていました。少し時計の針を戻してみたいと思います。

2. ー(1)2019年の学生との出会い

2019年度。私が本学で初めに会った学生は、短い学生生活を謳歌しようというもの、専門性を身に付け良い就職先を見つけたい、というものあり。いかにも短大生らしい若者たちでした。

クラスには、受講態度が熱心で、自分の人生を切り開こうとする姿勢が魅力的な学生、起業を希望する学生、飛び切り優秀でレポートを読むたびに私が唸りたくなるような学生もいました。（学期が終了してから分かったことですが、優秀な学生はほとんどが奨学生でした。）

もちろん、かつて私自身がそうであったように、まだ親の庇護のもとにあってのんびりと夢の中にいるような学生がクラスの大半を占めていました。

同時に、クラスには「日本は格差社会であり、自分たちはどんなに努力しても恩恵を得ない側にいる人生を送るはずだ」と思う学生も多かったです。

彼らは“上級国民”を憎んでいて、そのむき出しの憎悪の深さに、私は戸惑ってしまいました。大人の社会では、怒りや恨み、憎しみなどの負の感情をぶつけることを避ける傾向があるだけに、自分の授業中に見せられた、学生のあまりの憎悪の激しさに、私の中には今もお心に重い石があるようです。

不思議なことに、授業中に各社の世論調査と同じ問いを發すれば、ほぼ世論調査の平均値と同じような回答になったので、時折このクラスは、現代日本社会の縮図なのではないか、と思う程でした。

ただ、どのタイプの学生にも共通していたのは、みなネット上のいじめにあう事を恐れ、だからこそ、メディアというものは何か知りたくて授業に参加していたのでした。

2. ー(2)2019年の学生の関心

その① ～池袋暴走事件から見た

「社会のひずみ」～

この年、そして、その後の年度の学生が皆気にしていた「ネットいじめ」はまさに2019年に起きた「池袋暴走事故」に象徴されるものでした。

2019年4月、東京 池袋で当時87歳のドライバーが運転する車が暴走し、自転車に乗っていた31歳の母親と3歳の娘が死亡したほか、9人が重軽傷を負いました。ドライバーは高齢であり、事故による怪我もあって身柄を拘束されることはありませんでした。

池袋の事故の2日後、神戸市のJR三ノ宮駅前でも市営バスが横断歩道に突っ込み、20代の男女2人が死亡、4人が負傷するという事故が発生。こちらの事件では、当時60代の市営バスの運転手はその場で現行犯逮捕されています。

池袋の事故では、元高級官僚で退官後も業界団体の会長や大手機械メーカーの取締役などを歴任していた老ドライバーの経歴に注目が集まりました。“上級国民”だから特別扱いを受けている、という書き込みがSNS上で拡散していきました。

背景には、繰り返される高齢者が引き起こす交通事故への怒りもあったと思いますが、その後の裁判でドライバーは「ブレーキを踏んだが、利かなかった」などと車の不具合による無罪を主張し、過失を認めず車のせいする態度がさらに世間の非難を燃え上がらせていったのです。

検察側は、自動車運転処罰法違反（過失運転致死傷）の上限である禁錮7年を求刑しました。2021年9月の判決で東京地方裁判所は、車には異常がなく事故原因をアクセルとブレーキの踏み間違いと認定。裁判長は判決文を読んだ後に「判決に納得するなら責任と過失を認め、遺族に真摯に謝っていただきたい」と呼び掛けたことも話題となりました。

そして、SNS上などで加害者に対する過剰ともいえる誹謗中傷が集中したことが「過度な社会的制裁」として考慮され量刑にも影響し、結果的に判決は禁錮5年の実刑となり、被告は控訴せず収監されています。

ちなみに、神戸のバス運転手も自動車運転処罰法違反（過失運転致死傷）の罪に問われて、禁錮3年6月の実刑判決を受け、神戸市を懲戒免職処分になっています。

経緯を追えばわかるように、池袋の事故では、高齢と怪我を理由に身柄拘束はなかったものの、裁判は通常の手続きを踏んで行われ、他の事件と比べて“上級国民”だから量刑が軽かったなど、特別なものだったわけではありません。

しかし、2019年の事故発生から2021年に裁判で刑が確定するまでの一連の世論は「誰かが特別扱いを受けている」「自分は特別扱いを受ける側にはいない」という日本社会の屈折した感情を爆発させたかの様でした。

2017年から2018年にかけて「森友・加計学園問題」があり、さらに2019年の春には、総理主催の「桜を見る会」の問題が表面化。権力者や権力の周辺にいるものだけが「特別扱いされているのではないか」という疑念が渦巻いていた頃でした。

特に「桜を見る会」の問題の場合、招待された芸能人や文化人がその様子をSNSなどに挙げていたので、普段は政治に興味を持たない若い人たちにとっても身近なニュースでした。本来は総理が在日本大使館の外交官たちをもてなすための会合であったはずなのに、なぜか、政治家の「お友達」や「地元選挙民」が中心となって招待されている…金額だけ見れば、かつての政界汚職や贈賄などに比べれば額ははるかに小額でしたが…、権力や権力の周辺にいる特定の誰かだけが特別な便宜を払われることに、国民は敏感になっていました。

権力者に「忖度」する、特定の誰かに「便宜をはかる」。「忖度」や「便宜」が一種の流行り言葉になっていきました。

そして、池袋の事件の場合は、社会が、派遣や非正規など低収入で生活基盤が不安定な生活を送る若者が多い構造になっていたことも、“豊かな守られ

た老人”への怒りを爆発させた要因だったのかもしれませんが。

押し殺されていた感情が、この事件を引き金に爆発してしまったかのようでした。

ところが、憎悪の矛先は権力者やその周辺ではなく“水に落ちた犬”に向かっていきました。このドライバーはまさにそんな存在だったのではないのでしょうか。「社会のひずみ」が顕在化していきました。

しかし、2019年当時はまだ、事故の裁判の結果も出ていませんでしたし、「桜を見る会」の問題も宙ぶらりんのままでした。ただ、怒りが頂点に達していた時期だったと思います。

授業の中で、ある女子学生は「だって、“上級国民”は守られているんだもの」と吐き捨てるように言いました。あまりの激しさに私は面食らって、隣の席の学生に「あなたはと思うの?」と聞くと、彼女もまた文字通り怒りに肩を震わせて「“上級国民”はいるんです」と言いました。教室内には同調する輪が広がっていきました。

この時、私は「社会のひずみ」を肌感覚でとらえている学生たちの気持ちを前提にして、授業を進めることが課題であることを理解しました。

そして、私は後に、彼らの憎悪の背景には新聞やテレビなどの報道機関からもたらされるニュースに対して「本当の事を言っていないのではないか」「誰かに『忖度』して伝えるべきことを伝えてはならないのではないか」という根深い不信感があったことにも気が付きました。

2. ー(2)2019年の学生の関心

その② ～「ネットいじめ」への恐怖～

さて、さらにこの事件で特筆すべきは上記の通り、裁判所がネット社会の社会的制裁の苛烈さを認めたことです。ドライバーへの量刑は、ネットでの社会的制裁を考慮して求刑7年に対し、禁固5年となっています。

そして、この事件の「ネットいじめ」は加害者へ向かうだけではなく、被害者もまたネット上で激しく誹謗・中傷を受ける2次被害にあうという

恐ろしい事態になりました。池袋の事故の被害者の遺族は、家族を失った上にいわれのない非難の中で何年も苦しむことになったのです。

これに先立ち、世界的に大きなうねりとなったSNS上の#Me too運動はこの頃、日本でも大きな関心となっていました。それまで声を上げることができなかったセクハラやパワハラの被害者が声を上げ連帯を訴えた時期でした。同時に、キャンセル・カルチャー（デジタル・タトゥーにより過去の記録が暴かれ、功績などもすべて失ってしまう）の弊害も現れた年でした。

2019年度の最初の授業では、日経新聞の「池上彰の現代史を歩く～ハリウッドの光と影～」(2019年3月18日(月))を学生と読みました。

…記事は、#Me too運動を入口に、ハリウッドの中であった「赤狩り」と言論の自由について書かれたものでした。

その中で、学生の多くが、最も印象に残ったこととしてあげたのは「SNSが弱い立場の人が声を上げるきっかけとなったこと」でした。

一方、池袋の事故では、弱い立場の人（事故の被害者の遺族）がいわれのない非難を受けている…。「被害者が声を上げることができる場で、さらに被害をうけてしまう」。

学生は自分たちがネット社会の矛盾のただ中にいることに、恐怖を覚えていました。

2019年の学生は、従来の新聞やテレビなどの報道機関が伝えるニュースから見える社会と、ネット上でSNSで交わされている情報で成り立つ社会。2つの社会の狭間におりました。

パラレル・ワールドの中で、「社会のひずみ」を感じて、怒りと不信感を持ち、一步間違えば、自分が「ネットいじめ」の対象になるのではないかと、頼りなげに生きている若者たちの姿がそこにありました。

もし、この短大で初めての授業が2020年のオンライン授業からだったとしたら、私は、画面の向こうにいる学生がどんな傾向をもっているのか理解をす

るのに相当な時間を要したと思います。

学生は、毎年別の学生で一人一人別人格ではあるのだけれど、クラスとなった時に、その集団のおおよその傾向、地域性や校風、文化的背景が分かった上で授業を進めたいと考えるのは、教える側の願いです。

上記の通り、辛うじて2019年の学生たちのイメージがあった私は少しだけ安心して、その後に始まる画面の向こうの学生たちと授業を進めることができました。

3. 2020～2022年、コロナ禍の学生たち

3. ー(1)コロナ一年目 2020年

その① ～突然、閉ざされた社会～

2020年2月。安倍晋三首相は、全国一斉休校を宣言。学校が支えていた子供を持つ家庭の日常に大きな変化が起きました。

3月。コロナの初期、感染者が爆発的に増え、死者数が増大するにつれ、感染することへの恐怖、感染させることへの恐怖が、世界を人々を分断しました。集団生活を営むことが当たり前のヒトの習性が否定され、感染の恐怖と対人恐怖が重なるという、なんともやりきれない時間がスタートしました。「不要不急の外出」は控えるよう呼びかけられ、飲食業、エンターテインメント業界、旅行業などが打撃を受け始めました。

3月にはゼロゼロ融資も始まり、持続化給付金、雇用調整助成金…政府はコロナで経済的に痛手を負った企業やフリーランスの人々に経済支援を始めました。国民的な人気者だったタレントの志村けんさんや、俳優の岡江久美子さんが亡くなったことでも人々はショックを受けました。

体調不良を感じながらも番組に出演していたニュース番組の司会者のコロナ陽性が判明すると、恐ろしい程の非難が集中、人々は神経過敏になっていきました。

4月。政府により緊急事態宣言が発出されました。人々は、日々、感染状況、専門家の話を知らうとニュースを追いました。

コロナ患者は、病人であるにもかかわらず、行動の洗い出し、濃厚接触者への連絡、保健所への届け出など様々な負担が求められ、一定期間、隔離されました。

当初、罹患者が出た事業所などでは、防護服に身を包んだ保健所の職員が消毒に出向くようになっていました。まるで、近未来のホラー映画のようでした。(感染者が増えるに従いだんだんそれもできなくなっていました…。)

町から人々の姿は消え、いつもは混雑している渋谷のスクランブル交差点もまるでゴーストタウンの様でした。休業補償の恩恵を得られない中小零細企業や、補償の条件に合わないフリーランスの人たちは、困難な状況に陥ってしまいました。

学生は、学校にも行けずクラブ活動もアルバイトもできず、感染対策のため閉じこもった生活を余儀なくされていきました。感染を恐れ職場に行けなくなる人や、同居する家族に高齢者や持病を持つ人の中にはいつ自分が家族に迷惑をかけるか心配になり、心のバランスを崩すなど、精神的なダメージが出てくるようになりました。

人々は「自分が感染しないよう、自分が感染させないよう」日々を送りました。究極的な表現をあえて使うとすれば、「自分が被害者にならないよう、加害者にならないよう」、毎日内なる恐怖と戦っていました。

…社会知として、人々は、決して、感染症について、被害・加害という表現を用いませんでした。

ただただ、「人に迷惑を掛けたくない」という想いから、人々はあらゆることを「自粛」しました。

過剰なまでの自粛に、本当にこれでよいのか、という批判も出てましたが、当初は、厄災を一日も早くやり過ごす為の方策として、社会全体が「自粛」にむかっていたきました。

そんな中、「アマビエ」という妖怪が江戸時代後期の瓦版の中から蘇りました。私の姿を絵に描



「肥後国海中の怪(アマビエの図)」
1846年江戸時代後期肥後の国の瓦版
(京都大学図書館)

いて人々に見せよ」というのです。コロナ禍のお守りとして、一気に人々の間に広がりました。

ネット上では、#アマビエ・チャレンジが流行り、思い思いの現代風なアマビエが誕生。遊びの要素もありましたが、一種の神頼み、何かにすがりたい、という人々の気持ちに応えた再登場でした。

私の制作している『朝まで生テレビ!』は、一つの大きなテーブルをはさんで、喧々諤々十数人の論客が口角泡を飛ばす勢いの“熱い討論”で知られた番組でした。

ところが、コロナの間は、ソーシャル・ディスタンスを取るために出演者ごとに個人用のテーブルを新たに作成し、テーブルの間は2メートル以上の距離を取りました。なおかつその間には出演者同士を遮る衝立のようなアクリル板も設置するなど、感染予防に努めました。“熱い討論”より、何よりも“感染予防対策第一”でした。出演者やスタジオで働く技術陣に何かあっては大変です。

また、スタジオに設置した大きな換気装置による換気の音が放送に入るため、視聴者の皆さんには番組の冒頭で「換気の音が入るかもしれません」と、あらかじめお断りを入れました。

テレビは、長い間、「映像はより美しく精彩に、音声はよりクリアに」と技術革新を追求してきました。ところが、コロナ期間中は、テレビのニュースでは、専門家の中継はコロナ感染予防のためネット回線による中継が多くなり、視聴者は、ぼやけた映像やとぎれとぎれの音声を我慢せざるを得ない事態になりました。

人々が、会議や授業で使うネット回線も同じようでしたが、次第にそれにも慣れっこになってしまったように感じます。

時間がたつにつれ、通信会社の努力により通信状況もよくなっていきましたが、当初は、日本の中では、通信状況は放送より、「不安定」なものでした。

そんな中、「ネットいじめ」は益々ひどくなっていきました。閉鎖された鬱屈した気持ちのはけ口が、ネットに向かったのでしょうか。定量的に説明はできませんが、見るに堪えない罵詈雑言が散見されていきました。

5月。『テラスハウス』（フジテレビ、他）に出演していたプロレスラーの木村花さんが亡くなりました。恋愛リアリティー番組での役柄に、ネット上で凄まじい程の中傷や非難を受け悩んだ末、と報じられ、多くの人々が衝撃を受けました。

2020年夏、新型コロナの影響で戦後初めて全国高校野球選手権大会が中止となりました。

春の高校野球も中止になったのですが、中止決定の際、関係者の一人から「学校対抗試合で、もし、野球部の中の一人が感染しあるいは濃厚接触者になって、そのチームが出場できなくなったら、その生徒は一生本当につらい思いをするだろう。選手に辛い思いをさせたくない。だから、『一切なし』の方が良いのだ」という趣旨の発言がありました。

この発言は、当時の気分をよく表しています。

1964年から56年ぶりの開催となるはずのオリンピック、2020TOKYOオリンピックも1年順延となりました。

3. ー(1)コロナ一年目 2020年

その② ～2020年「オンライン授業始まる」～

2020年の4月5月当時はまだコロナの全貌が分からず未知の感染症だったため、みな息をひそめ新情報を待つという感じでした。社会全体のコロナ対応も試行錯誤中でした。

全国一斉休校には皆が一斉に戸惑いました。この頃は教師も学生も一緒にこの混乱に放り込まれたという、何というか、一種の連帯意識が芽生えていました。

通信事情が悪い中初めてのオンライン授業と一緒に臨み、「コロナがおさまったら、対面授業をしたいね」などと、いつか普通に会えることを楽しみにする感じでした。夏休みに行った補講で、換気の為明け放した大教室に集合した時には、「やっと会えたね」という気分になったものです。

しかも、この年の2年生は、1年次はコロナではなかったため、学内に仲間がいてクラブ活動もアルバイトもできていました。仲間同士、不慣れなオンライン授業もお互いに教えあったりしながら乗り切ることができていたのです。



2020年 画面に顔がきちんと入っているのは講師の顔だけ。誰が誰だかわからなかったオンライン授業

通信事情は悪く回線は途切れがちで、顔出しを嫌がる学生もいたりして、学生の表情がさっぱりわからない中、暗中模索で進めた授業でしたが、「対コロナへの緩やかな連帯」があったため、何とか和やかな雰囲気の中、学期を終えることができました。

この年、学生は、新聞やテレビなどの既存のメディアの情報に信頼を寄せ、自分たちがどう行動すべきか、情報を探しました。オールド・メディアへの信頼復活です。

「生活が困窮した学生への補助金が出る」というニュースを手掛かりに、学生支援緊急給付金を得た学生もいました。アルバイト先がなくなって困っていた学生は、ネットで補助金の情報を発見。「助かった!」「でも、本当なの?」と発信元を確認した所、テレビ朝日のニュースだったので「これは信頼できる」と手続きを進めたそうです。

閉ざされた生活の中で、学生たちの楽しみはスマホで動画を見る事でしたが、情報は、娯楽の為だけではなく「生きる為のものである」という事を学んだコロナ初年度でした。

「対面の良さと通信の良さ」、まさに、コミュニケーションやメディアの在り方を実地で学んだ時間でした。

しかし、木村花さんの事件は、学期中ずっと学生の関心事で、この問題は翌年度にも続いていくことになりました。

*この年の記録は、2020年度の紀要に詳述。

3. ー(2)コロナ禍2年目 2021年

その① ～コロナ禍での「対面授業」の模索～

2021年春、文部科学省は大学や高等専門学校などに対し「コロナ対策を講じた上で、学生の学校における経験を尊重してほしい」とし、卒業式も入学式も実施できるか検討するよう求めました。

しかし、社会は相変わらず、外出や、スポーツ、旅行は控えたほうが良いとされ、学校での給食も「黙食」が推奨され、人との接触の制限は続きました。このような社会行動様式は「新しい行動様式」や「新しい日常」と称されるようになっていきました。同時に、テレワークや時差出勤、オンライン会議などは推奨され、それは「働き方改革」と重なる部分もあり、多くの職場で採用されていきました。

2020年は必死に乗り切ってきたコロナの感染対策ですが、2021年にはそのひずみも現れ始めていました。一堂に顔を合わすこともなくなった、学校や職場、あらゆる場所で、普段の何気ないふれあいの時間が失われたことによる、コミュニケーション不足、行き違い、疎外感などで悩む人々が増えていきました。

また、患者数の増加により、医療従事者・介護従事者の疲労はピークに達していました。コロナ患者は入院したくても入院できず、病床数世界一のはずの日本で、受け入れ病院を見つけられなかった妊婦が救急車でたらいまわしにされ、亡くなるという痛ましい事件もありました。

さて、あらためて2021年、対面授業の再開についての文部科学省の文書を見てみましょう。

「令和3年3月4日の文部省令和3年度の大学等における授業の実施と新型コロナウイルス感染症への対策等に係る留意事項について（周知）」

文書の中では、令和2年度のコロナ感染予防のため遠隔授業など学修機会の確保が図られてきたことを尊重しながらも、以下のように続けていました。

「一方で、繰り返しお示ししているとおり、大学等の教育において、豊かな人間性を涵養するためには、直接の対面による学生同士や学生と教職員の間の人的な交流が行われること等も重要な要素です。」

あらためて、教育の場では直接の体験で人間性を育てることが大切、との通知でした。

今これを読めば当たり前のことのようにですが、この時期はまだ日本ではワクチン接種も実施されておらず、特効薬があったわけでもありません。

高齢者の施設などでは感染を恐れ、家族との面会も禁止され、ガラス窓越しで会うしかないという状況でした。ニュースなどでは、家族との面会も途絶え、認知症が進んだ高齢者の例も紹介されました。お正月や夏休みに里帰りをしたくても、家族に高齢者がいる場合は、「帰ってこないように」と言われ、離れた家族同士が何年も会えなくなる事態となりました。葬儀もごく少人数で行われるなど「家族葬」「小さなお葬式」という言葉も定着していきました。

卒業式・入学式などの学校行事行事だけでなく、人生の節目となる結婚式などのお祝いの行事も取りやめになり、ともかく、「感染予防のためには、人との接触を減らせ」という社会の流れがあったのです。

そんな緊張した状況の中での「感染対策を講じながら、対面を両立させよ」という通知です。学校の現場にはかなりの負担でした。

この頃になると、若い人はコロナに罹患しても比較的症状が軽いということが統計的に分かり始めていたので、文科省は対面に戻そうと考えたのだと推測されます。

その背後には、オンライン授業による落ちこぼれを防ぐ狙いがあったのではないかと私は思いました。

本学でも教務課や学生課など学校全体で、落ちこぼれる学生がないよう、一人一人に対しフォローをしていました。「感染対策をして、なんとか対面授業の再開をしたい」という涙ぐましい学校側の努力に、頭の下がる思いでした。

文科省の通知では「感染状況によっては、遠隔授業の選択も。各現場で判断を」ということでしたが、本学も対面授業に切り替える方針を打ち出し、私は自分の授業では迷わず対面授業を選択しました。

一方、同じ授業の中で対面とオンラインを並立させるハイブリッド型の授業をした教師もいました。また、受講生が多く、教室の換気状況から、三密を避けるためオンライン授業にせざるを得ないという学校もありました。ある大学では2021年もオンライン授業が続き、「一日中家で画面を見ている」「オンデマンドの授業も多く、昼間寝て夜画面を見ながら勉強している」という学生もいて「何のために大学に入ったかわからない」という声も聞かれました。

さて、対面授業は始まったものの「手洗い・うがい励行」「ソーシャル・ディスタンスをとる」「3密を避ける」上での再開でした。資料も学生たちに直接手渡しすることの無いよう、予め、各自の机の上に置いておかななくてはなりませんでした。授業の前後、机を消毒することも当たり前の日常でした。

3. 一(2)コロナ禍2年目 2021年

その② ～「ワクチン・デマ」に混乱する学生～

2021年の2年生は、2020年の2年生と全く状況が違っていました。

2020年に入学した彼らは高校の卒業式も短大の入学式もなく、クラブ活動もなくアルバイトもほとんどなく、友達を作ろうにも機会がまったくない状況でした。そんな中いきなりオンライン授業がスタートしてもとまどうばかり。困ったこと分らないことがあっても、誰に相談してよいやらわからない。多くの学生は一人ぼっちで短大1年生を始めた、たった一人で1年間を過ごしたようなものでした。ようやく対面授業が始まっても、友達はいない、友達を作ろうにも、これから「初めまして」からのスタートだったのが、2021年でした。

学生は不安だらけでした。ネットの社会に浸りながら同時に「ネットいじめ」にもおびえていま



「ワクチン接種について」広報する街中の掲示板 2021年4月

した。気になることとして、木村花さんの事件を挙げた学生も数多くいました。また、スマホなしには授業も就職試験も受けられない、と、悲痛な叫びを挙げた学生もいました。

ごちない、何をどう表現してよいかわからないような学生を前に、私も「初

めまして」と緊張してしまいました。

そして、この春に始まったコロナ・ワクチン接種は、6月になると学生を対象とする時期に差し掛かっていました。

学生は「ワクチンを打つと不妊症になる」というネット上のデマに振り回されて、大パニックに陥っていきました。そのパニックぶりは、「見るも哀れ」と言った方が良いでしょう。

2年生は就職活動のため接種がいわば必須でした。「リスクとメリットをよく考えて接種しましょう」と言われても、接種するかしないか選択できる状況ではなく、面接希望の就職先がワクチン接種を求めていることなどもあり、接種せざるを得ない、という状況に追い込まれていました。

「就職のためにワクチンを打てば、将来不妊になる」という恐ろしい筋書きに、多くの学生が動揺。人生の大きな岐路に立っている彼らは、不安に駆られれば駆られるほど、ネット上の情報がどこまでが確かな情報で、どこからが憶測か、見極めることができなくなっていました。

（秋には、各報道機関がワクチン・デマの検証を行いました。この時期にはまだ検証は行われていませんでした。）

デマの一部は、ワクチンの治験データを用いいかにもそれらしく文章を組み立ててあり、初見でそれを読んだ人たちが、とっさに「これは危な

い！」と思うようなものでした。不安になった人々によってデマは拡散され「ワクチン不妊説」の波紋が大きく広がっていきました。

そもそも、初めてのワクチンに多くの人が戸惑いを覚えており、国主導のワクチンとはいえ、過去には過誤がなかったわけではないので、学生が不安を覚えても当然のことでした。

（この当時、日本では、諸外国に比べてワクチン接種の時期が遅いことによりかなり非難がありましたが、国は安全性を重視。日本人による治験が終わって一定の安全性を確認してから接種開始となっていたのです。つきつめて考えてみれば、国は、ワクチンを打てないまま亡くなっていく命とワクチンへの不安を払しょくする為の安全性を天秤にかける、究極の選択を行っていたことになります。パンデミック下の厳しい現実が、国民生活にのしかかっていた。）

いずれにせよ、私は医学の専門家ではなくワクチンそのものについて「不妊になるのか、ならないのか」など論じられるはずもなく、「絶対安全ですよ」など言えるはずもありませんでした。

しかし、誰がどのように情報を発信しているのか、情報の整理という観点から、この問題を考えることは出来ます。

私はまず「冷静になって」と言うしかありませんでした。その情報の出どころは？ 誰が何を言っているのか？ それは事実ですか、論評ですか、憶測ですか。フェイク・ニュースではありませんか？

もしかしたら、あなたのご家族がネット上の「ワクチンは危ない」という記事を読んで、あなたを心配して「危ないよ」と言っているのか、あなたも不安になってしまったのではないですか？

その「危ない」と言った元の記事は、誰が、どんなことを書いていたのか、確認しましたか？。

ネット情報に依存しがちな学生ですが、「誰が何を発信しているのか」「それは信頼できる情報なのか」を考えるようになりました。

「情報を精査するとはどういうことか」。メディア論の核心に触れるテーマに、彼らは自分の命の

問題として向きあうことになったのです。

時間がたつにつれて、学生が少しずつ冷静になっていくのが分かりました

3. ー(2)コロナ禍2年目 2021年

その③ ～「震災列島日本」を語り継ぐ～

ちょうどこの年は、2011年3月11日の東日本大震災から10年の節目にあたりました。

子供時代、小学校高学年で震災を経験した彼らに、大人になった目で大震災当時を振り返ってもらいました。

彼らは「震災列島日本」に生きるものとしてこの経験を語り継ぎたい」と、熱心に語りました。

授業では、ドキュメンタリー『津波を撮ったカメラマン』^{vi}と『テレメンタリー 3.11を忘れないゼロから街を造る、ということ～陸前高田10年の奇跡』を視聴し、それぞれの感想をカメラマンの千葉顕一さんと、プロデューサーの浦本勲さんに感想をお送りした所、お二人から丁寧なお手紙を頂きました。

ご自身が震災で自宅を失いながら、取材を続けた千葉カメラマンの言葉を、ここに引用します。

「懸命な皆さんに言うまでもありませんが、仕事上で命を懸けるとは、何かを、(自分や家族など)を守るために、真剣に取り組むという事です」

「皆さんもこれから長い人生何か大切なものを失う事があるかもしれない。その時に元に戻るのではなく『生まれ変わる』という発想をしてみてください。また、違った世界が見えてくるかもしれません」。

記録を残す、取材という自分の仕事に命を懸けた千葉カメラマンの言葉は、学生に深い感銘を与えました。

この年の7月3日、熱海市の伊豆山地区で土砂崩れがありました。本学のある本厚木からは、地理的・心理的に近い熱海での土砂崩れにも、彼らは心を痛めてました。

クラブ活動もアルバイトも満足には出来なかったかもしれないけれど、対面授業は、ほんのちょっとだけ彼らの青春に彩を与えました。授業で友人も出来たのでしょうか。最初はぎこちなく不安定だった学生も、夏頃になると、若者らしいパワーが漲ってくるようでした。

その彼らは、コロナ禍の中、社会人生活をスタートさせることになったわけですが、今はどうしているのでしょうか。私には、この2021年度の2年生たちが一番気がかりです。

*この年の記録は、2021年度の紀要に詳述。

3. ー(3)2022年コロナ禍3年目

その① ～大事件が続き、情報に翻弄される～

2月、ロシアがウクライナに侵攻。世界中に激震が走りました。領土拡張を力づくで行う、まるで20世紀の戦争でした。7月、安倍晋三元首相が凶弾に倒れるという、あってはならない事件も起こりました。この年から成人年齢が18歳に引き下げられて、学生たちが初めての国政選挙で投票を行うはずの参議院議員選挙の遊説中の事でした。

コロナの影が社会を覆った中、衝撃的な事件がたて続きにおき、人々はニュースに翻弄される日々でした。

また、この年の6月に侮辱罪が改正、厳罰化されました。コロナ禍で本格的なネット時代になり、「ネットいじめ」で心ない中傷や非難で傷つけられ命を絶つ人が続出、また犯罪被害者が理不尽な非難にさらされていました。法律が成立した日、木村花さんの母親の木村響子さん、池袋暴走事故の被害者の遺族の松永拓也さんらが会見に臨みました。

「度重なる悲劇に改正は遅かった」という声と、「表現の自由をおかすのではないか」という指摘がありました。

しかし、いわれなき中傷や非難、目を覆いたくなる罵詈雑言が飛び交う世界には、何らかの歯止めが必要でした。学生のほとんどは、この厳罰化に賛成でした。

コロナ禍も3年目、飲食業や美容業、旅行業界、運送業界、介護職など、人と接する業界から次第に人は去っていき、人手不足問題も徐々に社会問題となっていました。また、高齢で事業継続が難しくなった中小企業、飲食店などはコロナ禍をきっかけに廃業を選択、体力のない会社の中には退場する会社も増えていきました。町を歩くと、閉店したお店の張り紙をよく見るようになり、街の姿も変わって行きました。

3. 一 (3) 2022年コロナ禍3年目

その② ～コロナ禍の過ごし方で

学生の間に明暗が…～

「リベラルアーツとは人が自由に生きる術」。私はこの年、せっかくリベラルアーツセンターの科目として「メディア論」を学ぶのだから、「人が自由に生きるとは何か、一緒に考えてみましょうね」と学生に呼びかけました。

この年の2年生は、高校3年生でコロナ禍を迎えています。高校では修学旅行も学園祭も卒業式もなかったけれど、2年間は高校生らしい時間を過ごしていました。友人もいて、クラブ活動もしていて、クラスには身近に相談できる担任の先生がいて、そんな中でオンライン授業に切り替わった学年です。

オンライン授業の恩恵も受けていて、「通学時間短縮だから、オンラインの方がいいです～。朝起きたそのままでいいし～！」とちゃっかり。

2021年の2年生のような「頼りなさげさ」はなく、私はちょっと安堵したものです。

授業は、ロシアがウクライナに侵攻して一月半ほどしてからスタートしました。

普通の市民の生活が破壊されていく様を彼らはスマホで、掌の中で見ていました。これまで戦争や紛争などの映像は、新聞やテレビなどの報道機関から伝えられるものでしたが、今回は、ウクライナの市民たちが悲惨な状況を世界に知らせるためにSNSを利用しました。

市民が積極的にメディアを使った情報戦に参加

したのです。学生の掌に直接戦争の情報が届き、その生々しさに学生は動揺していました。半年間、授業の後のリアクション・ペーパーには必ず誰かしらが、「もう戦争はやめてほしい」と書いていました。

私は、戦争について、日本言論界の重鎮の二人保阪正康さんと田原総一朗さんの言葉を紹介し、「暴力をきちんと批判すること」「暴力に対するのは暴力ではなく、言葉の力こそが大切なのだ」と伝えました。

第2次大戦の記憶が遠くなる中、掌に届く戦争の映像は、あまりにもつらいものでした。

7月には安倍元首相銃撃事件が発生。平和な日本で元首相が選挙中に殺害されるという衝撃的な、ありえない事件でした。安倍元首相は史上最長の通算8年8カ月。後半の第2次安倍政権は2012年から2020年9月まで7年8カ月続きました。

学生にとっては物心ついたころから「安倍ちゃんは私たちのソーリ」でした。「安倍ちゃんは私たちのためにバラエティに出てくれた」。

彼らは安倍元首相をまるで身内のように感じていて、身内の死を悼むかのようでした。

凶弾に倒れた安倍元首相の写真や映像が新聞やテレビで報じられると、多くの学生は「痛ましい姿を見せられたくない」と拒否感を示しました。学生は「ネットでは悲惨な映像は溢れても、テレビは悲惨な映像は流さないはずなのに！やめてほしい」と訴えました。

通常、新聞やテレビなどの報道機関は、被害者の人権を守るため、交通事故や災害の被災者等の痛ましい映像を流すことはありません。

しかし、今回は、報道機関それぞれの社の判断で、選挙中に起きた元首相への銃撃事件を歴史的事実ととらえ、読者視聴者にありのままの事実を提示したのです。

学生は「テレビは、それが事実であったとしても残酷なものを流さない」と思っていたのに裏切られた思いだったのです。

私はこの事件を例に、報道機関では取材したものすべてを報じているわけではなく、各社が報道

基準に照らし、報道するかしないか判断したうえで報道していることを説明しました。

民放のテレビの場合は、放送法、そして、1.-(2)の学生の関心の項目⑤で記したように、民放連の放送基準があり、さらに各社の放送基準があります。

学生は、何を取材し何をどう報道するのか、「取材する事」と「報道する事」の違いを知り、報道の役割とは何か、学びました。

と、同時に、ネット上には規制がないことをあらためて確認することになりました。

ウクライナ戦争、安倍元首相の銃撃事件を通して、新聞やテレビなどオール・メディアの報道機関にも、ネット・メディアにもそれぞれの特性があり、その特性を生かした役割があること、その上で、「受け手には情報をとらえる力が必要であること」を学生は学びました。

さて、元首相銃撃事件では、学生から「なぜ、銃撃犯の関係していた宗教団体の名前がすぐ公表されなかったのか」と、報道機関に対して「隠しているのではないか、それとも『忖度』かなどの疑問がぶつけられました。

学生は、疑問に思ったことは検索すればすぐ答えが見つかるネットの世界に住んでいます。「答えは分かっているはずなのに…、さては、隠しているな」と。

これに対し私は、一般論として「取材とは当事者や関係者に会った上で事実を確認する作業が必要で、それには一定の時間が必要である」と、伝えました。

特に、今回のように、容疑者の身柄が警察当局にある場合、容疑者の身元確認・供述なども警察発表を待つしかありませんでした。そして、警察発表も事実かどうか、更に取材を重ねていくのです。時間を要するのは当然でした。

…銃撃犯は逮捕された当日には宗教団体について話をしていたことが、後に判明しました。事実を伏せていたのは報道機関ではなく捜査当局でした。捜査当局が発表しなかったのは、捜査及び参院選への影響も考慮しての判断だったようです。…

学生のこの疑問を通して、私が2019年当時感じた学生の中にある「誰かを『忖度』するのが世の中だ」という考え方が根深いこと、そして、既存の社会の仕組み（このケースでは、報道機関）への不信が根強いことを改めて、考えざるを得ませんでした。

一方で、学生がテレビについて、まるで保護者のように（今風な表現を使えば）「自分たちの心理的安全を守ってくれる存在」と盲目的に信じていたことは、私の発見でした。

そして、この年の学生には、コロナ禍の間に情報の渦に飲み込まれてしまった者と、ネット社会を上手に活用した者との間に大きな差がありました。クラスの中で、ここまでの開きがあることを感じたのは、初めてでした。

先に挙げた1.-(2)学生の関心②の『メディア・パズル』で紹介した様に、2022年には、「“私”とメディアの関係を図に表しましょう」と促しても、“私”を描くことができず、その理由を言葉にできなかったグループがいました。

10数年間毎年、このグループワークを行ってมาますが、“私”の無い図を見たのは、2022年のこのグループが初めてでした。

私は当初、このグループの学生は情報の渦の中にいるために“私”を見失ってしまったのかもしれない、と考えました。その後、改めて考えてみると、スマホで全ての情報が得られる彼らにとっては、情報は自分の中にあり、特に“私”を意識する事が無かったのではないか、と思うに至りました。

もし、私の推論が当たっていたとしたら、できれば発表の中で、学生自身の言葉で聞いてみたかった、と思います

一方、授業後のリアクション・ペーパーにこんなことを書いた学生がいます。

「今の私にとってこの授業はソーシャルメディアのようなものでした。自由に意見が言えて、仲間の意見をたくさん聞くことができ、有意義な時間でした。」

この学生はずば抜けて優秀でした。私は「授業が楽しいもので良かった」という気持ちがあった反面、「この学生は、ソーシャルメディアでしか自由な意見交流ができないのだろうか」と、淋しい気持ちにもなりました。

しかし、考えてみれば、学生は、友人と自由に会えることも集まることもできず、学校での昼休みも黙食が推奨され、リアルな世界で自由な交流の場を持つことが叶わなかったのです。

学生は、リアルな交流の代わりにSNSの世界で様々な人と交流し、自分なりに考えを深めていったのでしょう。

さらに別の学生です。

「私は、ネット社会で自由になったと思います。声を上げる事すら許されなかった過去があるからこそ、今、誰でも大衆に向けて意見が言えるようになったと思います。ですが、自由になりすぎて、必要のない恐怖が増えたことも事実です。自分たちが求めて自分たちで作った便利ツールを正しく使う事が未来が明るくなる一歩だと思います」

心強い言葉です。

「自由に生きるとは何か」という、私の問いにも答えてくれていました。

コロナ禍でネット社会になり、情報に翻弄される者、自覚的に社会参加する者、その明暗がくっきり表れた2022年でした。

*この年の記録は、2022年度の紀要に詳述。

4. 2023年に「コロナ禍を振り返る」

4. ー(1)～学生が振返ったコロナ禍～

さて、2023年です。学期後半に、学生に、自分のコロナ期の体験をテーマに「1分ニュースの原稿」を書いてもらい、みんなの前で読んでもらいました。3年分の総括に与えた時間は30分ほど。パッと心に浮かんでいるものを原稿化しているだけに正直な気持ちが表れているようです。

この学年は、高校1年の終わりから一斉休校を経験し、高校2年生の時にオンライン授業になった学年です。

【学生のコロナ体験】…1分原稿から。

◇「コロナ流行で初めて『休校課題とオンライン授業』にとっても困りました。新学期が始まり、学校には登校せず学校から送られてきた休校課題をただひたすらやる日々でした。課題が送られたはいいものの、私の高校は単位制で友達が必ず同じ授業を取っているとも限りません。そのため、なかなか相談できる相手が居らず困りました。オンライン授業でも知らない人ばかりだったため、とても心細い生活でした。」

◇「コロナ渦で行った『オンライン授業』が慣れてなくて大変でした。朝と帰りのHRの時間にグーグルクラスルームに入り、出欠を取っていました。HRの時間以外は、基本的自由だったので締め切りまでに課題を終わらせること以外何もありませんでした。課題は、教科書の丸写しやワークの他に、ユーチューブを使った『オンデマンド』の課題がありました。URLに入ることが難しかったり、アカウントを変えるなど大変なことが多かったです。しかし、それらは今となっては、良い経験です。『対面のよさ』『オンラインのよさ』両方を知れる、この時代ならではの良い機会でした。」

◇「私はコロナ渦での高校生活に大変苦しみました。やっと高校生活に慣れてきた1年生終了まじかにコロナが流行し、休校を強いられ、外出

もできなくなっていました。登校が再開しても、昼食時は黙食や、部活中のマスク必需などたくさんの制限がある中で生活していました。さらに文化祭や体育祭、修学旅行などあらゆる行事が中心となりました。しかし、私たちのクラスではよくクラス写真を撮っていて、その際にはマスクなしでもよいというルールのおかげで、メディア（ネット）を使わずとも、笑顔のよく分かる写真と思い出を残すことができました。」

ほとんどの学生が、オンライン授業で困ったこと、一方で、「対面の良さ」と「オンラインの良さ」に気づいたことも書いています。さて、興味深かったのは次の学生です。

◇「『オンライン授業で嫌だったこと』コロナ下のオンライン授業で『顔出しすることに』戸惑いました。高校一年生の春休みぐらいから、新型コロナウイルスが流行し、「緊急事態宣言」により、学校が休校になりました。高校2年生になり、『グーグルミート』を使ったオンライン授業が始まりました。最初はラッキーと思っていましたが、『顔を出さないといけない』ことがとても嫌でした。顔を出すことで、対面だったら、すっぴんでも気にならないけど、オンラインだと見られている気がして、恥ずかしかったからです。『はやく学校に行って対面で授業したい』と毎回思う日々でした。」

私はこの学生に、「学校に行っても人に顔を見られるじゃない?」と尋ねました、すると、「学校だと誰も私のこと見たりしません。ほっといてくれるし。気もしてもいないし。画面だと、顔をじっと見られるから嫌なんです」。

…成程！。

お年頃なので「可愛く見られたい、かっこよく見られたい」という気持ちもあったことでしょう。あるいは、恥ずかしがり屋さんなのか、自意識のせいかな…。

しかし、確かに…。

教室では、自分の顔は「画面いっぱい」にはな

らないのです。

スマホやPCでの会議は画面全体に自分の顔が表示される時があります。これはちょっと恥ずかしい。

おそらく、この学生は他の人のアップもじっくり見てしまうタイプなのではないでしょうか。スマホの画面をじっくり見ていることの裏返しのような感情もあったのか、と思いました。

さらに、メディア論的に考えれば、画面の自分は「切り取られた現実」なのです。

実際に授業に参加しているのは自分自身なのに、画面上で大首絵のようにアップになった自分の顔が授業に参加しているのを（客観的に?）見ながら、授業を受けるのです。鋭敏な感覚の持ち主が「メディアによって切り取られた自分と向かい合いながらの授業」に、違和感を覚えていたとしても不思議はありません。

2020年に初めてオンライン授業を行った際に、「顔出しを嫌がる」学生の真意をはりかねていた私は、3年経って答えをもらった気がしました。

さて、「コロナ禍」を活動的に過ごした学生もいました。

◇「私はコロナ禍で休校になっている際にやる事が無かったのでアルバイトをたくさんしていました。私はマクドナルドでアルバイトを始めてまだ1年目だった。アルバイトを始めて数カ月が絶ち仕事にも慣れてきたタイミングでコロナが流行り始め、様々な感染対策がされ始めました。具体的にはレジに透明な板を設置したりマスクの着用が義務付けられたり店内での飲食が禁止されたり、お会計の際は手渡しをするのではなくトレーで受け渡しをするようになりました。アルバイトに慣れ始めたタイミングで様々なことが変わってしまい、苦労しました。コロナが緩和されコロナ前に戻ったやり方などがあり、まだ制限されたこともありましたが、元に戻りやりやすくなり、嬉しかったです。」

次の学生は「コロナか」の「か」を、「下」と表現しています。総じて、元気に過ごした学生は

「禍」の字を使わず「下」と表現しています。

◇「私は緊急事態宣言中、週5でバイトをしていました。飲食店などは仕事が減ったと思いますが、私は倉庫でバイトをしていたので、コロナ下で利用者が増え仕事がたくさん増えました。いつもは、週3で18時から22時でバイトをしていましたが、コロナ下では、週5の13時から22時までバイトをしました。初めはヘトヘトでもう週5で入るのやめたいと思っていたけど、だんだん慣れてきて緊急事態宣言もあつという間に終わってしまいました。バイトしかしっていないけど、給料が良かったので良いコロナ下を過ごせたな、と思います。」

この原稿を読んだあと、皆から「すご〜い」と、歓声が上がりました。次は、創意工夫で乗り越えた例です。

◇「コロナ下で初めての『弓道段位試験』をして、とても困難にぶつかりました。高校一年の秋から新しく始めてみた『弓道』。新学期が始まり学校に行ける日と学校に行けない日が出てしまい、練習をすることが難しくなっていました。そんな中、受けることになった『段位試験』。コロナで、対面の試験ではなく、動画を撮り送ることに。射場が小さくカメラを置く所があんまりなかったが、何とか撮影しました。結果は、受けた部員は全員合格。練習する時間も限られた中で、全員合格をすることができてとても良かったです。」

◇「コロナ下で、スマホの便利さを改めて感じました。コロナが流行し、感染が広がってきたころ、安倍晋三首相が緊急事態宣言を出し、全国の学校が一斉に休校となりました。私の高校では一人一人にGメールアドレスが渡されており、そこからグーグルアカウントを作り、クラスルームなどを使ってオンライン授業が行われていました。一つの端末では授業を受け、もう一つの端末では、友達とずっと通話しておりました。学校に登校し友だちと顔を合わ

せることが一番ですが、スマホのおかげで、外に出れない退屈な毎日でも、少しは楽しい思い出ができました。」

学生は皆一様に「スマホのおかげでコロナの時期を乗り越えられた」と言っていました。オンライン授業に慣れるのには苦労があったけれど、スマホがあったから、淋しさを楽しさに変えられたのだ、と。

さて、最後に紹介するのは、「青春を返せ」です。

◇「高校生のときにコロナの流行を経験し、非常に悲しいことがありました。新型コロナウイルスの流行初期、私は高校で軽音楽部に所属していました。一回目の文化祭でライブを経験し、2年生になってからの発表を楽しみにしていた折に、対面での活動ができなくなってしまいました。何とか活動しようと規制緩和後、動画を撮影し、演奏を完成させる試みもしましたが、編集技術もなく制作は上手くいかず、また、どうしても演奏の良さ、楽しさはなくなりました。その後も、警戒体制は解けず、2年生、3年生の文化祭での発表は中止となってしまいました。もし、あのころに戻れるなら、もう一度。ライブをやりたいと今でも思います。」

この原稿の発表にはクラス中が共感しました。

「そうか、ライブができなかったんだね。」

「もう、『私の青春を返してくれ』って。コロナがなかったら、と思うとやり切れません。でも、もう時間は戻りません。悔しい。」

コロナ禍を振り返ってあらためて、誰にも向けられない悔しさがこみ上げたのか、学生は涙をこぼしそうでした。

4. ー(2)～私が駆け足で振り返れば…

私のコロナ後遺症～

私の学生のコロナ禍を振り返れば、2020年は未知の感染症の恐怖に支配され、命と向き合い内省的になった年であり、新聞やテレビなど旧来の報道機関、オールド・メディアへの信頼が復活した

年でした。2021年は閉塞感からくる鬱屈とネット上のフェイク・ニュースやワクチン・デマに振り回された混乱の年、2022年は激変する社会情勢を受けて情報の氾濫に対処できない年だったように思われます。2023年は「コロナ明け」の年でしたが、授業期間中は回復へ向かう混乱期で、平時に戻るために青息吐息している学生の姿がありました。

私自身は、2021年のゴールデンウィーク中にコロナに罹患しています。ワクチン接種は始まっていたものの、まだ私の年齢は対象ではなかった時期でした。

当時のルールに従い、発熱後、区の保健所でコロナ陽性が確認されると隔離生活となりました。症状は軽度で特に治療を受けることはなかったのですが、その後、ひどい後遺症に苦しむことになりました。喘息のような激しい咳が一月続き、常に横になっていたほどの倦怠感、ついには体を動かすことが困難になって上手く歩けなくなりました。階段を降りようにも足をどうしておろしたらよいか、分からなくなっていました。4カ月ほど症状が続いた後、少し体の状態が良くなったかなと思ったある日、ごっそりと脱毛し、目のくぼみのあたりに小さいイボが一斉に吹き出しました。驚いて皮膚科に行くと、コロナの後遺症という事でした。イボはひと月ほどで嘘のように消えてしまいましたが、脱毛はなかなか回復せず1年半たってもコロナ禍を経て伸びた髪はひょろひょろとしています。若い人だったら耐えられない試練です。

そして、何か、記憶の蓋に穴が開いてしまったような感覚。罹患以降、「もうこれはいいかな」と思った事象は、ものの見事に記憶からこぼれ落ちるようになりました。コロナの後遺症の一つの症状としてあげられているブレイン・フォグという頭に霧がかかった状況とはまた違う、空恐ろしい程の記憶の欠如感です。

とはいえ、今、私は多少の違和感を抱えながらも、普通の生活を送れています。

一般には、コロナについては、倦怠感、味覚・嗅覚の消失、躁鬱感、脱毛…さまざまな後遺症が

伝えられています。コロナの後遺症^{viii}によって、社会生活がままならなくなった多くの事例が時々ニュースで流れるたびに私は胸が痛みます。

もし、私が学生だったら…。

感染すれば、就職活動などできなくなります。後遺症に苦しめられて、普通の生活を送る気力がなくなったら？学校に行けなくなったら？。

脱毛で苦しんだ外国の若い俳優さんが亡くなったというニュースもありました。

私の場合はゴールデンウィーク中の隔離でしたので、会社や学校にそれほど迷惑をかけることはなく済みました。また、会社は、出社比率を下げることで三密を回避しようという時期でしたので、在宅勤務やオンライン会議などで、なんとか仕事を続けることができました。社会全体がコロナ禍と戦っている時期だったため「自分だけがコロナの被害者ではない」という意識があったことも救いでした。

しかし、2023年の学生は違います。社会全体が「社会復帰」しなくてはならないのです。

自分だけがコロナのせいで「朝、起きられない」「やる気が出ない」などとは言ってられません。

中には、閉ざされたコロナ禍の社会から抜け出して、コロナ明けの社会の動きについていけない学生もいるかもしれません。私のように、コロナに罹患して後遺症に苦しんでいるものもいるかもしれない…。

それでも今、彼らは必死で社会参加しようとしています。「社会復帰」には長い時間がかかるはずです。大人たちには、彼らの状況を理解し受け止めることが求められています。

4. ー(3)～未来を拓く人たち～

上記1ー(2)で、2023年の学生の関心として、まず「AI」を挙げました。大人たちが将来自分たちの職がAIにとってかわられるのではないか、という不安を抱えているようなものとは違っています。当たり前のように、新しい技術を受け入れる、という感覚でした。

そして、『メディア・パズル』の発表の中では、「情報は誰かが取材し発信しているもの」と取材者を図の中心においた学生たち。新聞やテレビなどの報道機関が果たす役割にも気が付きました。2021年、2022年とは明らかに違う視点から、情報を取らえることができています。

コロナ禍で、社会が停滞しデマに翻弄されていた状況から脱し、SNSとの付き合い方にも理性的にアプローチしている姿がありました。

2023年の学生は、2015年のスマートフォンの発売の頃からずっとSNSと付き合ってきました。家庭や学校の教育方針でスマホを使っていなかった人もいたはずですが、高校2年生の授業をオンライン授業で受けることになり、PCやスマホがコロナ禍の間、ずっと傍らにある状態でした。

彼らは「対面とオンラインの良さ」、どちらも体感しています。これは、彼らの財産です。

また、コロナ禍で家に籠っている間に彼らは世界中の古今東西のアーカイブされた映画や動画を見て、目が肥えた鑑賞者となっています。

YouTube、InstagramやTikTokなどの映像から、世界の今を知ることも容易になりました。

一方で、コロナの自粛期間、活字文化がネットに急速に移行する中で、街の中から書店の姿が急速に消えて行きました^{viii}。私の学生は、「本屋さんに行く楽しみ」を味わえているのでしょうか。彼らにとって、これから出版や書籍はどんな存在となっていくのでしょうか。

今の学生に、2019年当時の学生が「“上級国民”は、いるんです」と社会に対していらだったような雰囲気はありません。

日本社会のひずみが解消されたわけではないのですが、コロナ禍に学生時代を過ごした彼らは、成長の過程で命の重みと向き合いました。そしてネット社会で自分は被害者にも加害者にもなりうる存在であることを体験しています。この点が、コロナ以前の学生と違っています。

学生は今、「コロナ明け」の社会の中で、見えない誰かにいらだつよりも、まずは、自分の世界をしっかりと作ろうとしているようです。「失われ

た青春を戻そう」と、真剣です。

職場で、どこか、別の場所で、若い世代と一緒にになった人は、彼らの学生時代を想像してあげてください。コロナ禍、彼らがどんな風にメディアと付き合ったか…。

もしかしたら、対人関係がちょっと苦手かもしれません。でも、それは、青春期にリアルな青春を楽しむ時間が少なかったから、というだけなのです。

彼らは、リアルとバーチャル、パラレル・ワールドの狭間で頼りなげにしていた時期を越え、閉塞した社会の中で「対面の大切さ」を知り、テクノロジーによるコミュニケーションの手段を獲得した世代なのです。そのことがこれからの社会を切り拓く財産になるはずです。

まとめに

2024年1月1日、能登半島で大地震が発生。建物は崩れ、道路は遮断され、停電、断水状態が長く続いています。「水」は命を支えるもの。「何がつらいと言って、水がないことが一番つらい」と人々は苦しさを訴えています。今、被災地には「蛇口をひねればきれいな水が出てくる日本」の姿はありません。

メディアは過酷な現地の情報を伝えています。放送手段が限られる中で、2022年10月に日本でもサービスを開始したスターリンクの衛星を利用しながら、現地からの中継を続けた放送局もありました。「命を守る」災害報道は報道機関の責務です。

また、地震発生後の24時間もたたないうちに、NHKでは地震の被災地の映像に「偽情報」という字幕を表示し、ネット上でのフェイク・ニュースへの注意を喚起しました。ライフラインが遮断された被災地に、救援隊もたどり着かず、救援物資も送れない中の注意喚起です。

過酷な状況におかれている被災地の人たちの姿を前に、混乱が起きないこと、何とか早く復旧することを祈るしかありません。

世界では、クライナ戦争、ガザ危機。戦争や紛争に巻き込まれ命の危機に向き合っている人々も

います。

そして、「コロナ明け」と言われる日々の中でも、後遺症に苦しんでいる人、コロナで友人や近親者を失った人もいます。私も身近で大切な人、仕事仲間を失っています。仕事を失って、立ち直れない人もいます。コロナ禍が明けても、私達はコロナの傷跡に直面しています。

2019年から2023年度まで、私は延べ200人の学生と共に過ごしました。彼らは、2000年代半ばに生まれた、いわゆるZ世代に属する若者たちでした。彼らの目を通してコロナ禍の社会を見ることができた有意義な時間でした。毎年学生たちの置かれている状況は異なりましたが、若い人たちが、このコロナ禍の経験を財産として、新しい困難に立ち向かってくれることを願います。

謝辞

この稿を書くにあたり、小棹理子先生、築瀬千詠先生、上野敦史先生、兵頭潤さん、大槻裕志さん、天野由香子さん、星野康子さん、武田一宏さん、天野珠代さんに様々にお世話になりました。感謝申し上げます。

『コロナ禍の学生とメディア』をなんとか記録として残したい、という私の思いを受け止め、紀要の場を与えてくださった紀要委員会の皆様にもあらためて御礼を申し上げます。

引用文献 など

i 『朝まで生テレビ!』

1987年スタートのテレビ朝日の深夜討論番組。毎月月末金曜・深夜放送。司会：田原総一郎、進行：渡辺宜嗣・下平さやか。政治・経済・皇室問題・原発・ジェンダーなど幅広いテーマを老若男女、専門家や文化人、ジャーナリスト、当事者など立場の異なる論客が一堂に会して議論する。筆者は2013年からプロデューサーを務める。

ii 厚生労働省HP

<https://www.mhlw.go.jp/stf/corona5rui.html>

「新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行後の対応について」

iii メディアでのA Iの利用事例。

①NHKは2018年、「ニュースのヨミ子」というキャラクターでA Iアナウンスの活用を始め、現在は『おはよう日本』などの報道番組で「これまでに入ってきたニュースをA Iによる自動音声でお伝えします」とお断りを入れた上で、放送している。NHKの広報は、「A Iアナウンスは人間の業務の一部は代替できるが、人間を代替するものではない。人間のアナウンサーの仕事はなくなる」としている。

②2023年11月2日に配信、10日に発売となったザ・ビートルズ最後の“新曲”「ナウ・アンド・ゼン」は1970年代にジョン・レノンが作成したデモテープから、A Iの最新技術を用いてジョンの歌声を抽出して新たにつくりあげたもの。全英シングルチャートにて1位を獲得し、同時に様々な記録を打ち立てた。

③2023年11月、漫画の神様、故手塚治虫さんの「ブラック・ジャック」の新作を、生成A Iと人間のコラボで制作するプロジェクトがスタート。「生成A Iが、人間の創作能力にどれだけ貢献できるのか。その可能性と課題を探ること」がねらいという。

iv 『ろっぽんプロジェクト』

東京大学大学院情報学環とテレビ朝日の共同研究。『ろっぽんプロジェクト～市民と放送局の協働的メディアリテラシー活動の構築～』は、2007年から2009年度にかけテレビ朝日創立50周年記念事業として行われた。東京大学の責任者は水越伸教授。筆者はテレビ朝日側の責任者。本学でメディア論を統括・シラバスを監修している上野敦史講師もテレビ朝日のお客様フロント部に所属し「ろっぽんプロジェクト」の中心メンバーとして多くの学校へ出前授業に行き、各地の市民講座を運営。「ろっぽんプロジェク

ト」の活動は、上野講師がプロデューサーを務めたテレビ朝日の自己批評番組「はい!テレビ朝日です」で随時、視聴者への報告として放映された。

- v 2023年、テレビ番組制作者が制作・公開したドキュメンタリー映画の例としての3作品。

①『「生きる」大川小学校 津波裁判をたたかった人たち』

「なぜわが子が学校で最期を迎えたのか」10年間にわたり、その答えを探して撮影し続けてきた親たちの記録。

監督 パオ・ネットワーク 寺田和弘

2023年第78回毎日映画コンクール ドキュメンタリー賞受賞

2023年キネマ旬報ベストテンの文化映画部門第2位。

②『“ハマのドン”御年91歳。最高権力者に挑んだ。』

カジノ誘致に向けて決戦の場となった横浜市長選。“ハマのドン”こと藤木幸夫が人生最後の戦いに打って出る。

この作品は、テレビ朝日系列ドキュメンタリー『ハマのドン “仁義なき戦い”』（2021年11月放送）と、さらに、民教協スペシャル『ハマのドン “最後の闘い” 一博打は許さない』（2022年2月放送）を元にしている。番組版はそれぞれ、テレメンタリー2021年度最優秀賞、放送人グランプリ2022優秀賞を受賞した。

映画版は、2023年キネマ旬報ベストテンの文化映画部門第3位。

監督 テレビ朝日 松原文枝

プロデューサー 同 雪竹弘一・江口英明

③『ノーリミット ユア ライフ』

全身の筋肉が衰え、身体が動かせなくなる難病ALSに冒された武藤将胤と、発症を知った上で結婚した妻・木綿子が愛と科学で病気に立ち向かう姿を追ったドキュメンタリー。

監督 FLEX 毛利哲也

演出・プロデューサー テレビ朝日 浦本勲

vi 『津波を撮ったカメラマン』

東日本放送（KHB）の石巻市局のカメラマン千葉顕一さんを追ったドキュメンタリー作品。

東日本放送2011年6月7日放送。ニューヨーク・フェスティバルで国連賞銅メダルを受賞。…「ニューヨーク・フェスティバル」（1957年発足）は、テレビ番組・映画・ラジオ・広告・インターネットなど、あらゆるジャンルの映像作品を審査・表彰する国際的なメディア・コンクール。

vii 『コロナの後遺症』

厚生労働省HPより

「新型コロナウイルス感染症に感染された方へ。症状が長引くことを知っていますか」

viii 消える書店

書籍の電子化により厳しい経営を迫られ、町から書店が消えている。日本出版インフラセンターによると、2003年度に2万880あった書店数は、2024年2月時点では1万960と激減。全国の市区町村1741のうち456で書店がない。

また、創業1881年の歴史ある神田の三省堂書店は2022年5月一時閉店。1978年開業の東京駅近くの八重洲ブックセンターも2023年3月に営業を終了。それぞれビルの立替や再開発などの事情があり、新しいビルでの再開を告知している。しかし、これまで長い間、町のランドマークでもあった書店が消えてしまうことが、「本屋文化の衰退」とあわせニュースとなって、連日報じられた。

My students and Media during the Coronavirus pandemic 2020-2023

Yumiko SUZUKI

【Abstract】

The 2020 coronavirus pandemic has changed both the world and Japan. During a period when people could not freely interact face-to-face, the way we interacted with the media changed dramatically, and technology evolved at a remarkable pace. During the coronavirus pandemic, students reaffirmed the role of old media outlets such as newspapers and television. Although they felt an affinity for internet media through entertainment and interaction on SNS, they also felt fear of “cyberbullying” and “fake news”. How have generation Z students interacted with the media and what have they learned during the coronavirus pandemic? We are documenting this coronavirus pandemic in order to provide material for thinking about the relationship between people and media in a new era.

【Keywords】

The coronavirus pandemic, Media, Generation Z, SNS, AI, Fake news, Cyber-bullying, The war in Ukraine, Johnny's problem, The incident of former prime minister Shinzo Abe assassination